

松江市文化財調査報告書 第153集

松江赤十字病院別棟建設に伴う

松江城下町遺跡
(母衣町127-2)(母衣町128)(母衣町198-1)
発掘調査報告書



2146737

島根大学附属図書館蔵書

平成25(2013)年1月

島根県松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

松江赤十字病院別棟建設に伴う

松江城下町遺跡 (母衣町127-2)(母衣町128)(母衣町198-1) 発掘調査報告書



平成25(2013)年1月

島根県松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例 言

1. 本書は、平成24年度に委託を受けた、松江赤十字病院別棟建設に伴う松江城下町遺跡（母衣町127-2、128、198-1）の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、平成24年度に松江赤十字病院から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した調査である。
3. 本調査地の名称、及び所在地は次のとおりである。

(名称) 松江城下町遺跡 [母衣町127-2 (A棟)、母衣町128 (B棟)、母衣町198-1 (保育棟)]
(所在地) 島根県松江市母衣町127番地2、母衣町128番地、母衣町198番地1

4. 開発面積、現地調査の期間及び調査面積は次のとおりである。

[開発面積] 1905.7㎡ (A棟489.7㎡ B棟767㎡ 保育棟649㎡)

[試掘調査] 平成24年5月1日～平成24年5月2日

トレンチ3本 3.75㎡ (A棟) 2.7㎡ (B棟) 4.5㎡ (保育棟)

[本発掘調査] 平成24年7月17日～平成24年7月27日 82.4㎡ (A棟基礎杭部分)

平成24年7月30日～平成24年8月7日 73.5㎡ (保育棟基礎杭部分)

平成24年8月8日～平成24年8月29日 191.1㎡ (B棟基礎杭部分)

平成24年9月3日～平成24年9月10日 138.7㎡ (A棟地中梁部分)

平成24年9月18日～平成24年9月21日 134㎡ (保育棟地中梁部分;市教委立会)

平成24年9月27日～平成24年10月11日 207.4㎡ (B棟地中梁部分)

5. 調査組織は以下のとおりである。

[平成24年度] 試掘調査

調査主体者 松江市教育委員会 教育長 福島律子

事務局 松江市教育委員会文化財課 文化財課長 錦織慶樹
調査係長 赤澤秀則

調査員 主任 川上昭一、副主任 川西 学、副主任 徳永 隆

調査補助員 金森みのり (嘱託)、高橋真紀子 (嘱託)

小川真山美 (嘱託)、岩橋康子 (嘱託)

遺物整理員 荻野哲二 (嘱託)

[平成24年度] 本発掘調査

事務局 松江市教育委員会 教育長 福島律子

文化財課長 錦織慶樹、調査係長 赤澤秀則

専門企画員 曾田 健、主任 川上昭一

調査実施者 財団法人 松江市教育文化振興事業団

理事長 松浦正敬

常務理事 松浦克司、事務局長 原 成美

埋蔵文化財課長 藤原 博、調査係長 古藤博昭
専門企画員 後藤哲男(事務担当)

調査指導 島根県教育委員会 文化財課 企西幹 今岡一三
調査員 小山泰生(担当者)
調査補助員 渡邊真二
遺物整理員 小原明美

6. 調査に携わった発掘作業員

木村 司、岩成敏章、中村慎市

7. 本書に掲載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下のものを行った。

渡邊真二、金坂 昇、小原明美、木村由希江

8. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々や機関から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

株式会社四門 文化財事業部 文化財研究室主任研究員 鈴木裕子

国立大学法人熊本大学 埋蔵文化財調査センター 埋蔵文化財調査員 石丸恵利子

財団法人米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 主任調査員 佐伯純也

島根県立古代出雲歴史博物館 学芸員 澤田正明

島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター 阿部賢治

松江歴史館 学芸員 新庄正典

9. 本書に掲載した現場写真、遺物写真は小山が撮影した。

また、木簡の赤外線写真にあたっては、島根県古代出雲歴史博物館の協力をいただいた。

10. 本報告書の執筆・編集は、松江市教育委員会文化財課の協力を得て、小山が行った。

11. 本書における方位は平面直角座標北をとし、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海拔標高を示す。

12. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

陶磁器編年：『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会2000

焼塩壺編年：小川 望『時期別の様相』『焼塩壺と近世の考古学』同成社2008

13. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

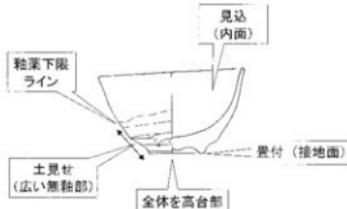
SK：土坑 SD：溝 SB：建物 SP：柱穴・ピット SE：井戸 SS：礎石

SW：石垣 T：トレンチ

14. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

15. 遺物の部位名称は、右記の図を参照。

16. 遺物図版における縮小率は、原則として陶磁器・土師質土器・瓦は1/3、木製品は1/4、銭貨は1/2とする。



本文目次

例言

第1章 調査に至る経緯と関連調査	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の範囲と方法	2
第3節 試掘調査・石組水路立会調査	4
第2章 位置と環境、および武家屋敷の変遷	6
第1節 地理的環境	6
第2節 周辺の歴史的環境	7
第3節 絵図資料にみる調査地の変遷	11
第3章 A棟の調査成果 [松江城下町遺跡 (母衣町127-2)]	12
第1節 A棟の基本層序と調査手法	12
第2節 A棟 第1面調査成果	16
第3節 A棟 第2面調査成果	23
第4節 A棟調査成果のまとめ	28
第4章 B棟の調査成果 [松江城下町遺跡 (母衣町128)]	30
第1節 B棟の基本層序と調査手法	30
第2節 B棟 第1面調査成果	34
第3節 B棟 第2面調査成果	41
第4節 B棟調査成果のまとめ	44
第5章 保育棟の調査成果 [松江城下町遺跡 (母衣町198-1)]	46
第1節 保育棟の基本層序と調査手法	46
第2節 保育棟 第1面調査成果	47
第3節 保育棟 第2面調査成果	50
第4節 保育棟調査成果のまとめ	53
第6章 総括	55
第1節 母衣町周辺における現況地盤と旧地表面 (I層) の検出高の比較	55
第2節 発掘調査の成果と今後の課題	57
出土遺物観察表・一覧表	61

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 調査地位位置図	3	第22図 B棟基本土層図	30
第2図 調査区配置図	4	第23図 B棟東西・南北土層断面横断面図	31~32
第3図 武部調査土層断面図	5	第24図 B棟調査トレンチ・地中梁配置図	33
第4図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図	7	第25図 B棟第1遺構面平面図	34
第5図 松江藩主の系図と家紋	9	第26図 B棟第1面検出遺構平面図・断面図	35
第6図 調査地周辺の江戸時代の絵図と現在の地図	11	第27図 B棟第1面遺構内出土遺物	38~39
第7図 A棟基本土層図	12	第28図 B棟第1面地中梁調査出土遺物	39
第8図 A棟東西土層断面横断面図	13~14	第29図 B棟第1面遺構外出土遺物	40
第9図 A棟調査トレンチ・地中梁配置図	15	第30図 B棟第2遺構面平面図	41
第10図 A棟第1遺構面平面図	16	第31図 B棟第2面検出遺構平面図・断面図	42
第11図 方形石組井戸A-SE01平面図・立面図	16	第32図 B棟第2面遺構内出土遺物	43
第12図 屋敷境石垣(溝)A-SW01平面図	16	第33図 B棟第2面遺構外出土遺物	43~44
第13図 A棟第1面検出遺構平面図・断面図	17	第34図 保育棟基本土層図	46
第14図 A-地下ピット部分平面図(第1面・第2面) 屋敷境石垣立面図	18~19	第35図 保育棟調査トレンチ・地中梁配置図	46
第15図 A棟第1面遺構内出土遺物	21	第36図 保育棟第1遺構面平面図	47
第16図 A棟第1面地中梁調査出土遺物	21~22	第37図 保育棟第1面遺構外出土遺物	49
第17図 A棟第1面遺構外出土遺物	22	第38図 保育棟第2遺構面平面図	50
第18図 A棟第2遺構面平面図	23	第39図 保育棟第2面検出遺構平面図・断面図	51
第19図 A棟第2面検出遺構平面図・断面図	24	第40図 保育棟第2面遺構外出土遺物	52~53
第20図 A棟第2面遺構内出土遺物	25~26	第41図 松江藩都市計画図での比較地点(磯町~母衣町)	55
第21図 A棟第2面遺構外出土遺物	27	第42図 武家屋敷明細帳にみる高橋九郎左衛門の 屋敷地と屋敷の推定範囲(松平期後期)	58

挿表目次

表1 主な中世山城の城主の変遷	8	表5 現況地盤と旧地表面(1層)の検出高の比較	56
表2 松江藩主の時期区分	9	表6 出土遺物観察表	61~62
表3 松江とその周辺に関わる略年表	10	表7 出土遺物一覧表(A棟出土遺物)	63
表4 調査地に比定される時期ごとの屋敷地人名 および高さ	11	表8 出土遺物一覧表(B棟出土遺物)	64~65
		表9 出土遺物一覧表(保育棟出土遺物)	66

写真図版

A棟調査写真(図版1~図版4)

B棟調査写真(図版5~図版7)

保育棟調査写真(図版8)

絵図目次

「編年別松江城下町絵図」：島根大学附属図書館蔵…11

「寛永年間松江城家数町之図」：丸亀市立資料館蔵…11

「松平期松江城下町絵図」：島根大学附属図書館蔵…11

第1章 調査に至る経緯と関連調査

第1節 調査に至る経緯と経過

平成24年4月17日に松江市教育委員会文化財課（以下、当課とする）において、松江市母衣町地内に予定されている松江赤十字病院別棟建設工事についての事前協議がなされた。別棟は母衣町127番地2に松江赤十字病院A棟（以下、A棟）、母衣町128番地に松江赤十字病院B棟（以下、B棟）、母衣町198番地1に松江赤十字病院保育棟（以下、保育棟）の3棟を建設する計画である。本工事の計画範囲にあたる母衣町は、城下町として江戸時代に整備され、^{うらやまんど}内山下と呼ばれる外堀の内側に位置する上級・中級武士の屋敷が置かれた場所であり、計画地は未調査地であることから、何らかの調査が必要である旨を回答した。

平成24年4月19日付で試掘調査依頼書が提出されたので、当課において平成24年5月1日にA棟・保育棟、同5月2日にB棟の工事計画範囲内にそれぞれトレンチを1箇所ずつ設定して試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、3箇所全てのトレンチで遺物や遺構面を検出したことから、開発予定地に松江城下町遺跡が遺存していることが確認された。これにより、遺跡に影響が及ぶ工事は、建物基礎杭部分、地下ピット部分、地中梁部分であると判断した。

さて、松江の城下町は盛上造成が繰り返され現在の地表面に至っており、影響が及ぶ遺構面の数や時代は工事の内容によって違っており、今回の建物予定地によっても違いがみられた。基本的には「工事で影響が及ぶ遺構面について調査を実施することとし、影響の無い遺構面については現状保存とする。」「本発掘調査面積が確保できる建物基礎杭部分・地下ピット部分は本調査を実施し、工事深度が浅い地中梁部分については、工事掘削により遺構面に影響が及ぶ第1面までを本調査で対応する」という方針を鳥根県教育庁文化財課と確認し、遺跡の保護と調査面数を減らすべく事業者との協議に臨んだ。

数度わたる協議の結果、遺跡への影響を最小限にとどめるべく計画変更にご協力いただけることとなり、変更した設計書を添付した文化財保護法第96条による届出が6月13日に提出された。変更設計では、地中梁部分については江戸時代初期の堀尾氏の遺構面は現状保存が可能となった。これにより、A・B棟は基礎杭と地下ピット予定地について2面分の本調査と地中梁予定地1面分の本調査、保育棟については基礎杭予定地の本調査を実施することとなった。

本発掘調査は財団法人松江市教育文化振興事業団に委託し、平成24年7月17日から同10月11日までの間で実施した。また、保育棟地中梁部分の調査については当初、掘削が地下に影響を及ぼさない工事計画におさまる範囲であったため調査は必要なしとしていたが、基礎杭部分の調査において試掘調査で想定された遺構面よりも浅い位置で礎石が並んで検出されたことから、本市文化財課が主体となり礎石の連続性を確認するために平成24年9月18日から同9月21日の計4日間、工事立会調査を実施した。

この他、A棟・保育棟の道路側溝に張り付いた石組水路の天端石が撤去されることとなり、平成24年8月2日にA棟東辺部分の石組水路を、平成24年8月20日に保育棟西辺部分の石組水路の工事立会調査を実施し、現況を記録に残した。

第2節 調査の範囲と方法

本発掘調査は、工事に先立ち、地下に影響を及ぼす建物基礎杭部分と地下ピット設置部分の調査を行った。その後、建物基礎部分に杭打ちが行われ、基礎杭と基礎杭とを連結する地中梁工事の掘削に併せて地中梁部分の調査を実施した。調査箇所の順序は工事の進捗との兼ね合いもあり、A棟→保育棟→B棟の順に行った。また、各調査区内で工事により影響のある部分に本調査区を設定した。各調査区の呼称は便宜的にT-〇〇で表記し、その頭に各調査地のアルファベットを付記している。(A棟=A・B棟=B・保育棟=H)

遺構番号は遺構を検出した段階で任意に設定し、調査終了後の整理作業において、それぞれ棟ごとに連番で振り直した。土層観察は原則として北壁及び西壁を基本としているが、壁面が軟弱な場合や汚水などにより崩落した場合においては、観察可能な壁面の実測を行った。作業内容は、遺構検出状況写真撮影→遺構の半截・完掘→完掘写真撮影→土層断面図化→土層観察→平面図作成→レベリング作業を行った。

A棟（建物基礎杭・地下ピット部分及び地中梁部分）

A棟の発掘調査は、建物予定地内489.7㎡のうち、地下に影響を及ぼす基礎杭工事部分82.4㎡と地中梁工事部分138.7㎡を対象としている。基礎杭工事部分において、杭打ちにより遺構面に影響のある部分に調査区を12箇所（A-T1～A-T12）設定し、地下ピットで遺構面に影響のある部分に調査区を1箇所設定して本調査を行った。掘削について、現地表下の攪乱層の除去及び第1遺構面上面の保護層10cmまでは重機による掘削を行い、以下は人力によって第1遺構面まで掘り下げ、精査・遺構検出を行った。第1遺構面検出後、さらに、第2遺構面上面の保護層10cmまで重機による掘削を行い、以下は人力によって第2遺構面まで掘り下げ、精査・遺構面検出を行った。第2遺構面検出後、最終的にはサブトレンチを設定し、I層（旧地面）の確認作業を実施した。地中梁部分の調査は掘削工事に併せて、掘削深度床面となる第1遺構面までの本調査を行った。A棟の調査成果は、第3章で詳述する。

B棟（建物基礎杭・地下ピット部分及び地中梁部分）

B棟の発掘調査は、建物予定地内767㎡のうち、地下に影響を及ぼす基礎杭工事部分191.1㎡と地中梁工事部分207.4㎡を対象としている。基礎杭工事部分において、杭打ちにより遺構面に影響のある部分に調査区を20箇所（B-T2、B-T4～T18、B-T20～21、B-T23～24）設定し、地下ピットで遺構面に影響のある部分に調査区を3箇所設定して本調査を行った。掘削について、現地表下の攪乱層の除去及び第1遺構面上面の保護層10cmまでは重機による掘削を行い、以下は人力によって第1遺構面まで掘り下げ、精査・遺構検出を行った。第1遺構面検出後、さらに、第2遺構面上面の保護層10cmまで重機による掘削を行い、以下は人力によって第2遺構面まで掘り下げ、精査・遺構検出を行った。第2遺構面検出後、最終的にはサブトレンチを設定し、I層（旧地面）の確認作業を実施した。地中梁部分の調査は掘削工事に併せて、掘削深度床面となる第1遺構面までの本調査を行った。B棟の調査成果は、第4章で詳述する。

保育棟（建物基礎杭部分及び地中梁部分 [市教育委員会立会調査]）

保育棟の発掘調査は、建物予定地内649㎡のうち、地下に影響を及ぼす基礎杭工事部分73.5㎡を対象としている。基礎杭工事部分において、杭打ちにより遺構面に影響のある部分に調査区を15箇所（H-T1～

H-T15) 設定して調査を行った。掘削について、現地表下の攪乱層の除去及び第1遺構面上面の保護層10cmまでは重機による掘削を行い、以下は人力によって第1遺構面まで掘り下げ、精査・遺構検出を行った。

また、当初は1面だけの調査だったが、第2面が想定されていた深さよりも浅い位置（基礎杭部分工事の掘削深度床面より上）で検出されたため、都合2面の調査を実施した。このため、地中梁工事においても遺構面に影響が及ぶことが判明し、地中梁部分の調査は松江市文化財課が主体となり、第1面で検出した礎石の連続性を確認するために立会調査を実施している。保存棟の調査成果は、第5章で詳述する。



松江城と調査地

(写真提供：島根県松江県土整備事務所)



第1図 調査地位置図 (1:12000)



第2図 調査区配置図 (1:1000)

第3節 試掘調査・石組水路立会調査

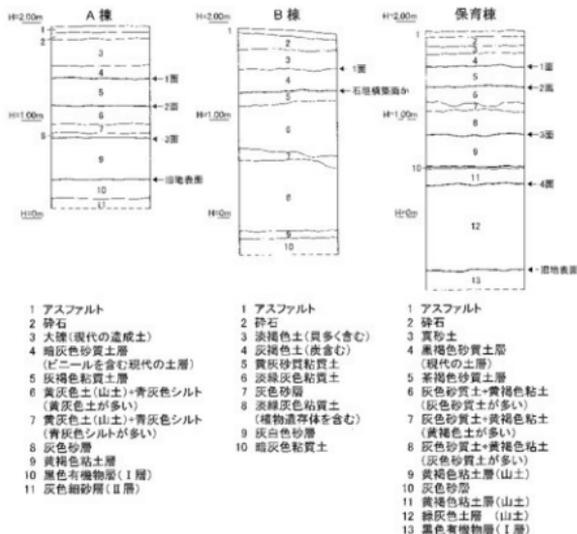
試掘調査

A棟試掘調査は、既存の建物を避けて駐車場部分に1.5m×2.5mのトレンチを1本設定して行った。調査の結果、3面の遺構面を確認した。第1遺構面は、現況地表面（標高1.9m）下約0.5mの灰褐色粘質土層（第5層）上面で、江戸時代末～明治時代の陶磁器が出土している。第2遺構面は、現況地表面下約0.82mの黄灰色シルト質土層（第6層）上面で、城下町第1整地層以降の嵩上げ造成土と考えられる。第3遺構面は、現況地表面下約1.15mの青灰色シルト質粘土層（第9層）上面で、江戸時代初期造成上の盛上層と考えられ、杭や掘立柱建物の柱を検出した。現況地表面下約1.6mで旧地表面（第10層）を確認している。

B棟試掘調査は、既存の建物を避けて試掘可能な部分に1.5m×1.8mのトレンチを1本設定して行った。調査の結果、現況地表面（標高2.0m）下0.4mで南北に向かう石列を検出した。浅い地点での検出であり、江戸時代後期の所産と考えられ、検出した位置から屋敷を区切る石組水路の一部を検出した可能性が高い。これ以下には粘質土が堆積しており、途中で砂層を混じえる。地表面から約2.3m（標

高約0.3m)まで掘削を行ったが、松江城下町遺跡で広く認められる黒褐色粘質土の旧地表面(Ⅰ層)は検出されなかった。よって、この地点に石組水路が築かれる以前の城下町造成当初の素掘りの大溝が埋設している可能性が高いものと推察された。

保育棟試掘調査は、既存の建物を避けて駐車場部分に1.5m×1.8mのトレンチを1本設定して行った。調査の結果、4面の遺構面を確認した。第1遺構面は、現況地表面(標高2.0m)下0.4m付近の茶灰色砂質土層(第5層)上面で、廃棄土坑を検出した。第2遺構面は、現況地表面下0.6m付近の灰色砂質土と



第3図 試掘調査土層断面図

石組水路立会調査

A棟・保育棟の道路側溝に張り付いた石組水路天端石部分が撤去されることとなり、立会調査を行った。

A棟石組水路調査は、敷地内の東辺部分に現存していた石組水路西側の天端石、南北長6mを対象とし、記録・図化を実施した。石組水路の天端は標高2.0m前後で平坦に揃えて据えられ、現存する石組の目地にコンクリート補強がされていることから、多少の擾乱や改変を受けているものと推察された。石組石材は、ほぼ大海崎石で積み込みは切込接ぎであった。なお、天端石以外の下段の石材は現地に地下保存されるため、調査は行っていない。保育棟石組水路調査は、敷地内の西辺部分に現存していた石組水路東側の天端石、南北長17mを対象とし、記録・図化を実施した。石組水路の天端は標高2.0m前後で平坦に揃えて据えられ、現存する石組や裏詰め部分はA棟石組水路と同様に石組の目地にコンクリートが混ざっており、多少の擾乱や改変を受けているものと推察された。石組石材は、ほぼ大海崎石で積み込みは切込接ぎであった。なお、天端石以外の下段の石材は現地に地下保存されるため、調査は行っていない。

第2章 位置と環境、および武家屋敷の変遷

第1節 地理的環境

松江城下町は、島根県東部の松江平野中央に位置し、北を島根半島、南を中国山地、西を穴道湖、東を中海に囲まれるという立地である。松江平野は、原始時代、外海とつながっていた穴道湾が形成した砂州および中国山地から流れ出る河川によって作られた沖積地である。そのため穴道湖周辺部は標高が低い低湿地であった。

島根半島を含む松江平野の土層層序は、古いところから古浦層、成相寺層、牛切層、古江層、松江層、中海層から成り立っている。松江平野の基盤は、新第三紀の堆積岩および貫入岩からなる松江層である。

遺跡のあり方に影響を与えるような大きな変化として、出雲平野を西流して外海に注いでいた「斐伊川」が江戸時代の寛永年間（1624～1643年）に東へ流れを変え穴道湖に注ぎ込むようになったことが挙げられる。当然、穴道湖の水位は上昇したと考えられ、低湿地に位置する松江城下町にとってその影響は軽微ではなかったと推測される。

また、城下町が形成された松江平野は、大雨や河川の氾濫等に起因する洪水に幾度もみまわられていたことが文献にみられる。近年の松江城下町遺跡発掘調査成果から、江戸時代を通して大規模な屋敷地造成を数回行っていることや、江戸時代から現在までの間に、平均約1.5mの嵩上げ造成を行っていたことが明らかとなっている。こうした造成を行い、洪水などの災害に対処していたものと思われる。



松江市地形写真（空中写真）（1947年11月3日撮影：国土地理院）

第2節 周辺の歴史的環境

本遺跡は、松江城本丸から南東約650mに位置する江戸時代の城下町遺跡である。さらに広域にみると、松江平野の北西部に位置している。この平野部には周知されている原始・古代の遺跡は少なく、ここでは周辺部を含めた中世以降の城館や遺跡について、若干触れておく。(第4図)

中世の松江

この頃の出雲国の政治・経済的中心地は、広瀬町(現:安来市広瀬町)にあった。このため、広瀬町から約17kmも離れた松江に関する文献史料は少なく、よく分かっていない。近世以前の松江は8世紀頃からあまり変化がなく、沼や浅い湖が残る湿地帯が広がり、中世になると宍道湖沿いの砂洲上に「末次」・「白潟」といった「郷」があったとされている。^{注1}

戦国時代の「末次」は、末次氏が治めていた。永祿6年(1563年)に末次氏が毛利氏から末次森分や市屋敷等をあてがわれていることから、末次荘内に定期市が立ち、市場集落が形成されていたと思われる。^{注2}

また、永祿13年(1570年)の尼子復興戦では尼子・毛利両軍の争奪戦の舞台となった。

「白潟」は、中国の明代に著された『籌海図編』(明の嘉靖41年:1562年)の中に出雲地方の港湾のひとつとして「失喇哈町(白潟)」と記載されている。また、毛利氏が河村又三郎なる人物を白潟・末次・中町の磨師・塗師・鞆師などの司に任じていることから、この地に商人・職人の集団が存在し、町場が形成されていたことがうかがえる。^{注3}

周辺の中世以降の主な城館

1. 松江城下町遺跡(母衣町127-2・128・198-1)
2. 松江城(末次城) 3. 白鹿城跡 4. 真山城跡
5. 和久羅山城跡 6. 茶臼山城跡 7. 荒隈城跡
8. 酒醒寺城跡
9. 松江城下町遺跡(殿町287・279)
10. 荒隈城跡(小十太郎地区) 11. 舎人遺跡
12. 藤津殿山城跡 13. 高柳城跡
14. 海老山城跡 15. 大高丸跡
16. 高つぼ山城跡 17. 小白鹿城跡
18. コゴメダカ遺跡 19. 堂頭山城跡
20. 川津城跡 21. 稲葉山城跡
22. 二保山城跡 23. 城如城跡
24. 城山城跡 25. 西城ノ前遺跡
26. 東城ノ前遺跡 27. 石台遺跡
28. 中竹矢遺跡 29. 天満谷遺跡
30. 市場遺跡 31. 黒田館跡 32. 下黒田遺跡
33. 黒田駐遺跡 34. 出雲国造館跡
35. 布志名燒寮跡群 36. 布志名城山城跡



第4図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図

松江城(2)は松江平野の北西端部に位置する標高約28mの亀田山に築かれた輪郭連郭複合式平山城である。関ヶ原の戦い後、慶長5年(1600年)に堀尾忠氏が出雲・隠岐両国24万石を拝領し、父古晴と共に安来市広瀬町の月山富田城に入った後、慶長12～16年(1607～1611年)にかけて築いたとされている。縄張りも亀田山の最高所に本丸があり、そこに五層六階の望楼式の複合天守をもち、本丸周縁には櫓を配置して高石垣をめぐらしている。さらに天守東側に二之丸、二之丸下ノ段、南側に三之丸、西側に腰郭を配置し、これらの外側に内堀をめぐらす。なお、中世において亀田山には末次城があったとされる。⁴⁴

白鹿城跡(3)は松江城の北西約3kmのところに位置し、松江市街地北側にある北山山脈から派生する白鹿山に築かれた中世山城である。戦国時代には出雲の戦国大名尼子氏の重要な支城であり、安芸の戦国大名毛利氏との雲芸攻防戦の舞台となる。城は白鹿山頂上部の平坦地を主郭とし、険しい地形を活用し大小の郭を設置する。

真山城跡(4)は白鹿城跡の北隣に位置し、「雲陽軍実記」によると平安時代末期に築かれたとの伝承がある。毛利元就が白鹿城を攻めた時に、元就の次男古川元春が向城として陣を置き、白鹿城陥落後は毛利氏による周辺支配の拠点となる。その後、尼子復興戦では尼子軍の手に落ちるが、尼子氏の出雲出国後に再び毛利氏の手に戻り、江戸時代を迎え破却される。城は尾根伝いに郭を築き、土塁や石積みも見られる。

和久羅山城跡(5)は松江城の東約5kmのところにあり、標高約262mの和久羅山に築かれた中世山城跡である。城主は当初、尼子方の原田氏であったが、毛利氏の手落ち、尼子復興戦の折には再び尼子方の羽倉氏が城主となり、尼子氏出雲出国以後に再度毛利氏の手に戻した。城は中海・穴道湖をはじめ松江市街が一望できる和久羅山の最高所に4つの郭をもち、腰郭や虎口がある。

茶臼山城跡(6)は松江城の南東約6kmのところにあり、標高約172mの茶臼山に築かれた中世山城である。

築城年代や城主は定かではないが、「雲陽誌」には雲芸攻防戦の際に村上伯耆守が拠ったとされている。茶臼山の最高所に主郭を持ち、その東西を別の郭で囲まれ、さらにその外側の東西に尾根を遮断する堀切が掘られ、山の斜面には連続堅堀群がある。

荒隈城跡(7)は松江城の西約1.5kmのところにあり荒隈山に築かれ、雲芸攻防戦における毛利軍の前線拠点として築かれた中世山城である。また、穴道湖北岸沿いに築かれたこの城は、穴道湖一帯の水運や流通機能を取り込んでいた。

満願寺城跡(8)は穴道湖北岸に接し、穴道湖の水運を掌握する水軍の拠点でもあった湯原氏の居城とされ、当初は尼子方に属していたものの、毛利元就の出雲進出により毛利方に属した。また、雲芸攻防戦での争奪の舞台ともなった。城の主郭部分には横堀があり、穴道湖に面する斜面には階段状遺構も認められる。

表1 主な中世山城の城主の変遷

城名	城主の移り変わり
白鹿城	尼子氏の居城(尼子十郎のひとり)→毛利氏
真山城	古川氏(毛利方)→毛利氏→尼子氏→毛利氏
和久羅山城	原田氏(尼子方)→毛利氏→羽倉氏(尼子方)→毛利氏
茶臼山城	城主不明
荒隈城	毛利氏の前線拠点
満願寺城	湯原氏(尼子方)→湯原氏(毛利方)

明治以降の城下町

松江藩は、明治4年(1871)の廃藩置縣で松江県を経て島根県となる。明治22年(1889)に松江市政が始まり、県庁所在地として発展し現在に至る。明治時代に入り、それまでの武家地は、そのまま公共施設に利用されたり、広大な土地は細かく短冊状に分筆されたりして庶民の住宅地へと移り変わっていく。現在でも通りや路地、外堀、内堀、鉤型路等が残っており、江戸時代の町割りの面影を見ることができる。

表3 松江とその周辺に関わる略年表

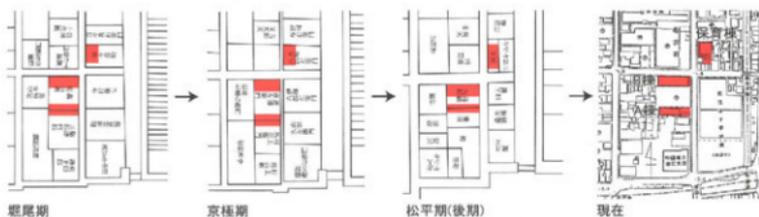
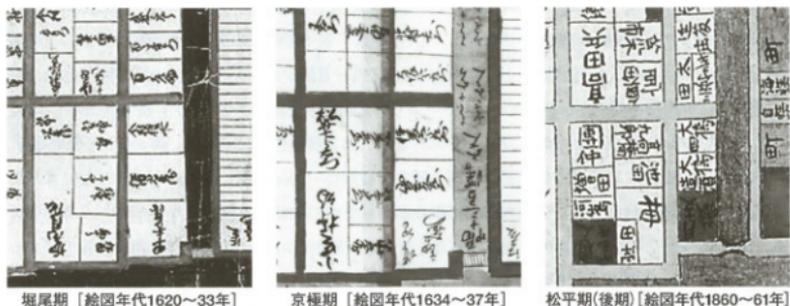
和暦(年)	西暦(年)	松江とその周辺に関わる略年表	主な出来事
天文9	1540	尼子詮久(晴久)、安芸遠征	
天文11	1542	大内義隆、出雲侵攻 富田城に迫るも大敗	
永禄3	1560	尼子晴久逝去	桶狭間の戦
永禄5	1562	毛利元就、出雲侵攻 荒隈城を築く	
永禄6	1563	毛利元就、白鹿城を攻略する	
永禄9	1566	富田城開城 尼子義久・秀久・倫久らが毛利元就に降伏	
元亀元	1570	毛利輝元、出雲国布部山で山中幸盛(鹿介)を破る	姉川の戦
元亀2	1571	尼子氏 出雲より撤退	
慶長5	1600	堀尾忠氏、徳川家康から出雲・隠岐両国24万石を拝領し、父古晴と共に広瀬の富田城に入る	関ヶ原の戦
慶長9	1604	堀尾忠氏逝去、古晴が孫忠晴を後見する	
慶長12	1607	松江城の築城開始、城下町の造成が始まる	
慶長13	1608	堀尾吉晴、広瀬から松江へ移る	
慶長16	1611	6月堀尾吉晴逝去、年末に松江城完成、城下町が形成される	
慶長19	1614	堀尾忠晴、大坂冬の陣に出陣する	大坂冬の陣
元禄元	1615	堀尾忠晴、大坂夏の陣に出陣する	大坂夏の陣
寛永10	1633	堀尾忠晴逝去、堀尾氏嗣子なく断絶する	
寛永11	1634	京極忠高、徳川家光から出雲・隠岐両国26万4千2百石を拝領し、若狭国小浜より出雲へ入国	
寛永13	1636	忠高、石見銀山を幕府から預かる	
寛永14	1637	京極忠高逝去	天草・島原一揆
寛永15	1638	松平直政、徳川家光から出雲国18万6千石を拝領し(隠岐国は預り地)、信濃国松本より出雲へ入国	
明治2	1869	松平定安、藩知事に任命	版籍奉還
明治4	1871	松江・広瀬・母里の3県を合併し、島根県となる	廃藩置縣
明治22	1889	松江市誕生	

第3節 絵図資料にみる調査地の変遷（第6図・表4）

今回の調査地は、松江市母衣町127番地2（A棟）、128番地（B棟）、198番地1（保育棟）に所在し、松江城本丸の南東約650mに位置する。東を流れる米子川・南を流れる江橋川は、松江城の外堀の一角を担っており、外堀の内側は「内山下」（現在の観町・母衣町）と呼ばれ、江戸時代を通じて上・中級武士が住んでいた場所である。母衣町は江戸時代において城郭に伴う外堀の内側（内山下）にあり、城下町構成上の重要な地区とされていた。また、松江城下町絵図から今回の調査地に該当する屋敷地を読み取ることができるため、絵図を基にしてそれぞれの藩主の時期ごとに屋敷地の変遷を示しておく。（詳細：第6章第2節-1）

下記の模式図（第6図）は堀尾期、京極期、松平期（江戸時代後期）の絵図を参照し作成した。なお、模式図中の人名は絵図面に書かれているものをそのまま記載した。表4は、屋敷地の人名および禄高である。

松平期は233年間の長い統治期間であり、城下町絵図として現存するものは複数枚確認されている。そのため、屋敷の拝領者は屋敷替えなどにより数名存在していたことが絵図や文献から読み取れる。今回示した松平期絵図は、発掘調査成果と整合させて考察した場合、出土遺物の示す年代観（第1遺構面）が絵図の示す年代観に該当する結果であったため、松平期（後期）の絵図を掲載した。



第6図 調査地周辺の江戸時代の絵図と現在の地図

表4 調査地に比定される時期ごとの屋敷地人名および禄高

調査地	住所・地番	堀尾期		京極期		松平期（後期）	
		人名	禄高	人名	禄高	人名	禄高
日赤A棟	母衣町127-2	堀津三郎四郎	200石	村上馬左衛門	400石	池田八郎右衛門	120石
日赤B棟	母衣町128	森勘兵衛	600石	斎藤庄左衛門	1300石	高橋九郎左衛門	500石
日赤保育棟	母衣町198-1	百々彦助	600石	大塚八郎左衛門	580石	太田半藏	300石

※A棟調査区内北側半分はB棟該当の屋敷地内に入る

第3章 A棟の調査成果 [松江城下町遺跡(母衣町127-2)]

第1節 A棟の基本層序と調査手法

1. A棟基本層序

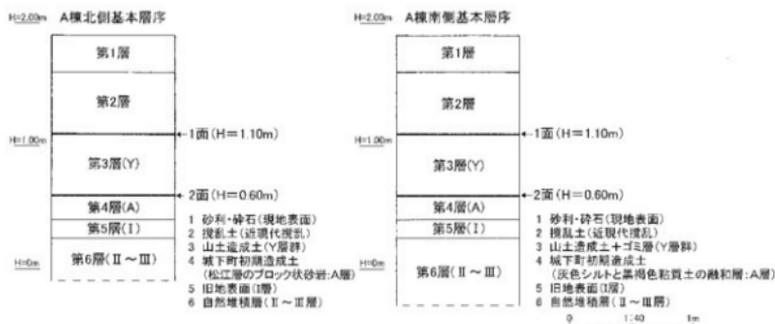
調査区内の現地表面標高は1.90mである。A棟の基本層序は、調査区内中央部から検出した東西に延びる屋敷境を境界として、調査区内北半と南半ではやや異なる様相を示していたため、個別に示す。(第7図)

A棟調査区内北側(A-T1～T11)では、計6層が確認された。上層から、第1層は砂利・碎石による現代の整地層、第2層は近現代遺物を含む攪乱層、第3層は整地層である山土造成土(Y層)、第4層は城下町初期段階の造成土と考えられる緑色～黄灰色のブロック状砂岩(A層)、第5層は黒褐色粘質土の旧地表面(Ⅰ層)、第6層は灰色～青灰色細砂層の自然堆積層(Ⅱ層)である。

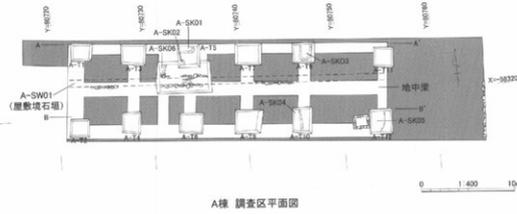
A棟調査区内南側(A-T2～T12)の基本層序でも、計6層が確認された。基本的には北側の層序に準ずるが、第4層について、南側では灰色シルトと黒褐色粘質土の融和層(A層)を城下町初期造成土として使用しており、北側との相違が見られた。このA層は、堀や屋敷境の溝などを掘削した際の土を利用したものと考えられ、旧地表面のⅠ層とさらに下層のⅡ～Ⅲ層が混ざり合った土層で構成される。また、南側では有機物を多く含む層(ゴミ層)や一部でシダ植物を敷き詰めたウラボロ層も確認している。

基本層の層厚は、地表面から順に第1層が30～40cm、第2層の攪乱層が50cm、第3層のY層が50cm、第4層のA層が20cm、以下は自然堆積層で第5層のⅠ層が15～20cm堆積し、その下が第6層のⅡ～Ⅲ層である。A棟調査区内では、事前の試掘結果などから2面の生活面を調査することとし、それぞれ上から1面、2面と呼称し遺構の確認及び調査を行った。Y層については、数単位に細分可能ではあるが、現段階において明確な時期区分を示していないため、本報告ではY層群として捉えることとした。なお、各層の呼称は他の層と区別するため、便宜的に山土造成土=Y層、城下町初期造成土=A層、旧地表面=Ⅰ層、自然堆積層=Ⅱ～Ⅲ層とした。

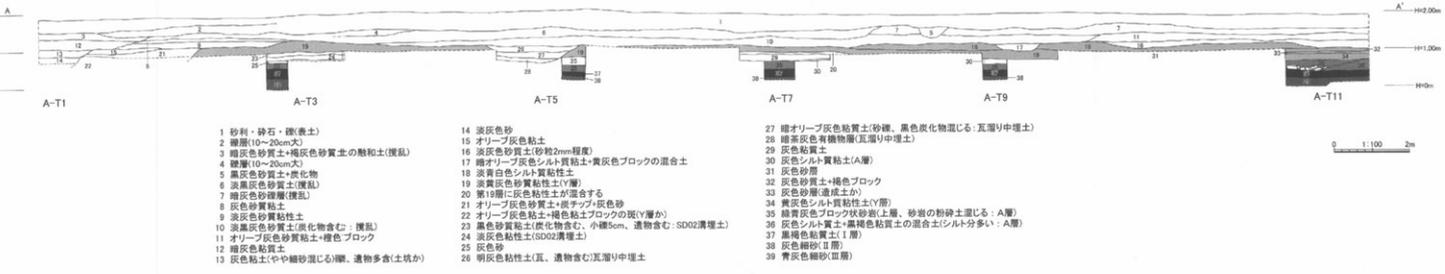
さらに調査成果として、A棟調査区の全体土層を把握するために東西土層横断図を示しておく。(第8図)



第7図 A棟基本土層図

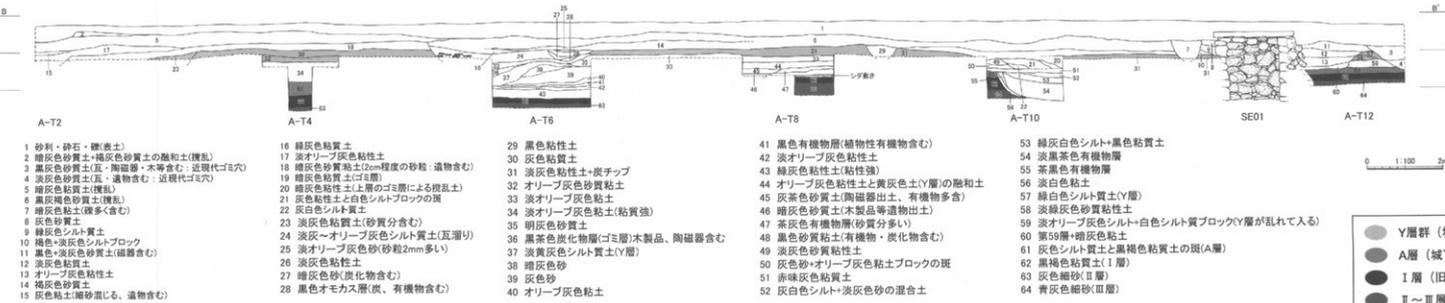


A棟北側東西土層横断面図 (A-T1~T11間)



- | | | |
|------------------------------|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1 砂利・砂石・礫(表土) | 14 淡灰色砂 | 27 暗オリーブ灰色粘質土(砂礫、黒色炭化物混じる(瓦溜り中埋土)) |
| 2 礫層(10~20cm丈) | 15 オリーブ灰色粘土 | 28 暗茶灰色有機物層(瓦溜り中埋土) |
| 3 暗灰色砂質土+暗灰色砂質土の融和土(擾乱) | 16 淡灰色砂質土(砂粒2mm程度) | 29 灰色粘質土 |
| 4 礫層(10~20cm丈) | 17 暗オリーブ灰色シルト質粘土+黄灰色ブロックの混合物 | 30 灰色シルト質粘土(A層) |
| 5 黒灰色砂質土+炭化物 | 18 淡黄色シルト質粘土土 | 31 灰色砂層 |
| 6 淡黒灰色砂質土(擾乱) | 19 淡黄灰色砂質粘質土(Y層) | 32 灰色砂質土+褐色ブロック |
| 7 暗灰色砂礫層(擾乱) | 20 黄1層に灰色粘質土が混入する | 33 灰色砂層(遠慮土か) |
| 8 灰色砂質粘土 | 21 オリーブ灰色砂質土+炭チップ+灰色砂 | 34 黄灰色シルト質粘質土(Y層) |
| 9 淡灰色砂質粘質土 | 22 オリーブ灰色粘土+褐色粘土ブロックの混(瓦溜り) | 35 黄灰色ブロック状砂礫土層、砂選の砂質土混入(A層) |
| 10 淡黒灰色砂質土(炭化物含む)・擾乱 | 23 黒色砂質粘土(炭化物含む、小礫5mm、遺物含む、SD02清埋土) | 36 灰色シルト質土+暗褐色粘質土の混合物(シルト分多い・A層) |
| 11 オリーブ灰色粘質土+褐色ブロック | 24 淡灰色粘質土(SD02清埋土) | 37 黒褐色粘質土(I層) |
| 12 暗灰色粘質土 | 25 灰色砂 | 38 灰色粘砂(II層) |
| 13 灰色粘土(やや細砂混じる)層、遺物多含む(土坑か) | 26 明灰色粘質土・瓦、遺物含む(瓦溜り中埋土) | 39 黄灰色粘砂(III層) |

A棟南側東西土層横断面図 (A-T2~T12間)



- | | | | | |
|-----------------------------|---------------------------|-------------------------|---------------------------|------------------------------------|
| 1 砂利・砂石・礫(表土) | 16 暗灰色粘質土 | 29 黒色粘質土 | 41 黒色有機物層(植物性有機物含む) | 53 緑白色シルト+黒色粘質土 |
| 2 暗灰色砂質土+暗灰色砂質土の融和土(擾乱) | 17 淡オリーブ灰色粘質土 | 30 灰色粘質土 | 42 淡オリーブ灰色粘質土 | 54 淡黒茶色有機物層 |
| 3 黒灰色砂質土(瓦・陶磁器・木等含む)・近現代ゴミ穴 | 18 暗灰色砂質粘土(2cm程度の砂粒・遺物含む) | 31 淡灰色粘質土+炭チップ | 43 暗灰色粘質土(粘性強) | 55 淡白色有機物層 |
| 4 淡灰色砂質土(瓦・遺物含む)・近現代ゴミ穴 | 19 暗灰色粘質土(ゴミ層) | 32 オリーブ灰色砂質粘土 | 44 オリーブ灰色粘質土と黄灰色土(Y層)の融和土 | 56 淡白色粘土 |
| 5 暗灰色砂質土(擾乱) | 20 暗灰色粘質土(上層のゴミ層による擾乱土) | 33 淡オリーブ灰色粘質土 | 45 灰茶色砂質土(陶磁器出土、有機物多含む) | 57 緑白色シルト質土(Y層) |
| 6 暗灰色砂質土(擾乱) | 21 灰白色粘質土と白色シルトブロックの斑 | 34 淡オリーブ灰色粘質土 | 46 暗灰色砂質土(木製品等遺物出土) | 58 淡緑灰色砂質粘質土 |
| 7 暗灰色粘質土(種多含む) | 22 淡灰色シルト質土 | 35 明灰色砂質土 | 47 茶灰色有機物層(砂質多含む) | 59 淡オリーブ灰色シルト+白色シルト質ブロック(Y層が乱れて入る) |
| 8 灰色砂質土 | 23 淡灰色粘質土(砂質分含む) | 36 暗茶色炭化物(ゴミ層)木製品、陶磁器含む | 48 黒色砂質粘土(有機物・炭化物含む) | 60 黄5層+暗灰色粘土 |
| 9 緑灰色シルト質土 | 24 淡オリーブ灰色シルト質土(瓦溜り) | 37 淡黄灰色シルト質土(Y層) | 49 淡灰色砂質粘質土 | 61 灰色シルト質土と黒褐色粘質土の混(A層) |
| 10 灰色+淡灰色シルト質土(磁器含む) | 25 淡オリーブ灰色砂(砂粒2mm多し) | 38 暗灰色砂 | 50 灰色砂+オリーブ灰色粘土ブロックの斑 | 62 黒褐色粘質土(I層) |
| 11 黄色+淡灰色砂質土(磁器含む) | 26 淡灰色粘質土 | 39 灰色砂 | 51 赤味灰色粘質土 | 63 灰色粘砂(II層) |
| 12 淡灰色粘質土 | 27 暗灰色砂(炭化物含む) | 40 オリーブ灰色粘土 | 52 灰白色シルト+淡灰色砂の混合物 | 64 黄灰色粘砂(III層) |
| 13 オリーブ灰色粘質土 | 28 黒色オモカス(炭、有機物含む) | | | |
| 14 暗灰色砂質土 | | | | |
| 15 灰色粘土(細砂混じる、遺物含む) | | | | |

凡例

●	Y層群 (城下町造成土：松平期)
●	A層 (城下町初期造成土：堀尾期～京極期)
●	I層 (旧地表面：城下町造成以前)
●	II～III層 (自然堆積層)

第8図 A棟東西土層横断面図

2. 調査の手法

発掘調査対象地は、松江城本丸の南東約670mに位置し、市道母衣町大橋川線の南北道路に面した近世城下町遺跡の屋敷跡である。今回の本発掘調査において、以下の4点に絞って調査を実施した。

- ① 当該地の江戸時代前期から幕末にわたる土地利用の変遷を把握する。
- ② 土層堆積の層序を横断土層図の作成により把握し、屋敷造成土の利用方法を解明する。
- ③ 遺構から確認される屋敷の空間構成を把握する。
- ④ 旧地表面（1層）の検出標高を確認して比較検討を行い、城下町造成以前の地形を復元する。

調査区の設定は、基礎杭工事部分において、杭打ちにより遺構面に影響のある部分に2m×2mの調査区を12箇所（A-T1～A-T12）設定し、地下ビットで遺構面に影響のある部分に5m×2.5mの調査区を1箇所設定して調査を行った。地中梁工事部分は掘削深度床面の第1遺構面までの調査を行った。

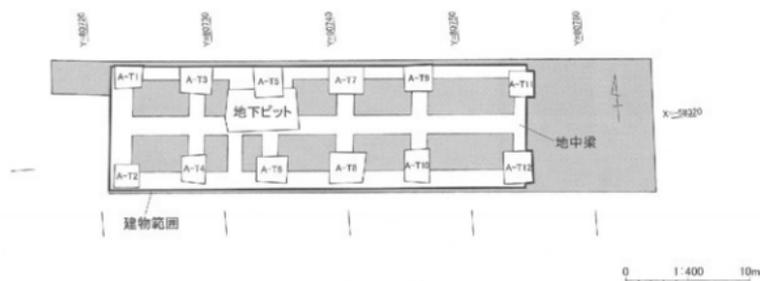
調査面積は、A棟建物予定地内489.7㎡のうち、地下に影響を及ぼす基礎杭・地下ビット工事部分82.4㎡と地中梁工事部分138.7㎡を対象としている。

基礎杭部分及び地下ビット部分は、平成24年7月17日から調査を開始し、同7月27日に調査を終了した。地中梁部分の調査は掘削工事に併せて9月3日から調査を開始し、9月10日に調査を終了した。

A棟の現況GLは標高1.90mである。遺構面については、標高1.10m付近でシルト質の山土造成土（Y層）を基盤とする第1遺構面を検出した。この遺構面では、土坑（ゴミ穴含む）を6基、屋敷境石垣（溝）を1条、方形石組井戸を1基検出している。

次いで、標高0.60m付近で城下町造成当初の盛土層（A層）を基盤とする第2遺構面を検出した。この遺構面では、土坑を5基、溝を2条、掘立柱建物の柱穴を4穴検出した。

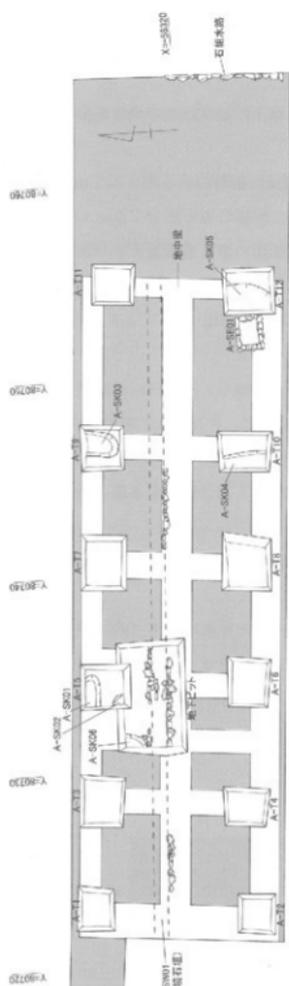
A棟調査成果では、特筆すべき遺構として地下ビット部分で検出した屋敷境石垣（溝）が挙げられる。この屋敷境石垣（溝）の検出により、松平期の屋敷地の特定が可能となった。また、屋敷境を境に北側と南側とで若干層序が異なる様相を示す結果となっている。屋敷境石垣（溝）の調査成果の詳細は次節に委ね、屋敷地の特定は第6章-第2節-2で詳述する。



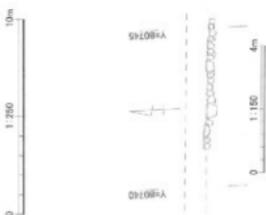
第9図 A棟調査区・地中梁配置図

第2節 A棟 第1面調査成果

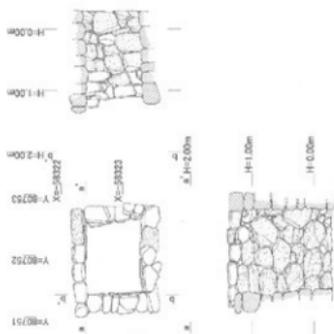
標高1.20~1.10m付近で山土造土（Y層）を基盤とする第1遺構面を検出した。この遺構面では、土坑を6基、屋敷境石垣（溝）を1条、方形石組井戸を1基検出している。以下に遺構の説明を詳述する。



第10図 A棟第1遺構面平面図



第11図 方形石組井戸A-SE01平面図・断面図



第12図 屋敷境石垣A-SW01平面図



1. A棟 第1面検出遺構(第10~13図)

A-SE01…東西幅1.8m、南北幅1.45m、深さ1.7mを測る方形を呈する石組井戸である。(第11図)

A-SW01…調査区中央部、東西に延びる屋敷境石垣である。地下ビット部分で検出し、地中梁調査において連続性が確認できた。検出規模は、東西21.5m、溝幅0.80mを測る。(第12図)

A-SK01…T5で検出した土坑で、規模は東西長軸1.65m以上、南北幅0.6m以上、深さ0.34mを測る。土坑埋土中から少量の陶磁器片や下駄などの木製品、瓦片などが出土したことから、廃棄土坑と考えられる。さらにトレンチ外西側・北側へ広がる様相である。

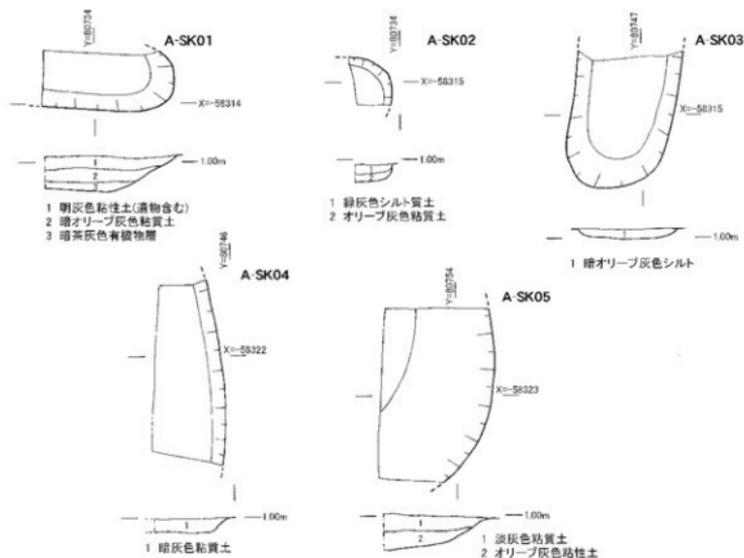
A-SK02…T5で検出した土坑で、規模は東西幅0.46m以上、南北幅0.6m以上、深さ0.22mを測る。土坑埋土中に瓦片や少量の陶磁器を含む。近現代の攪乱土坑と考えられる。(検出1/4程度)

A-SK03…T9で検出した土坑で、規模は東西幅1.26m、南北幅1.6m以上、深さ0.1mを測る。(検出2/3)

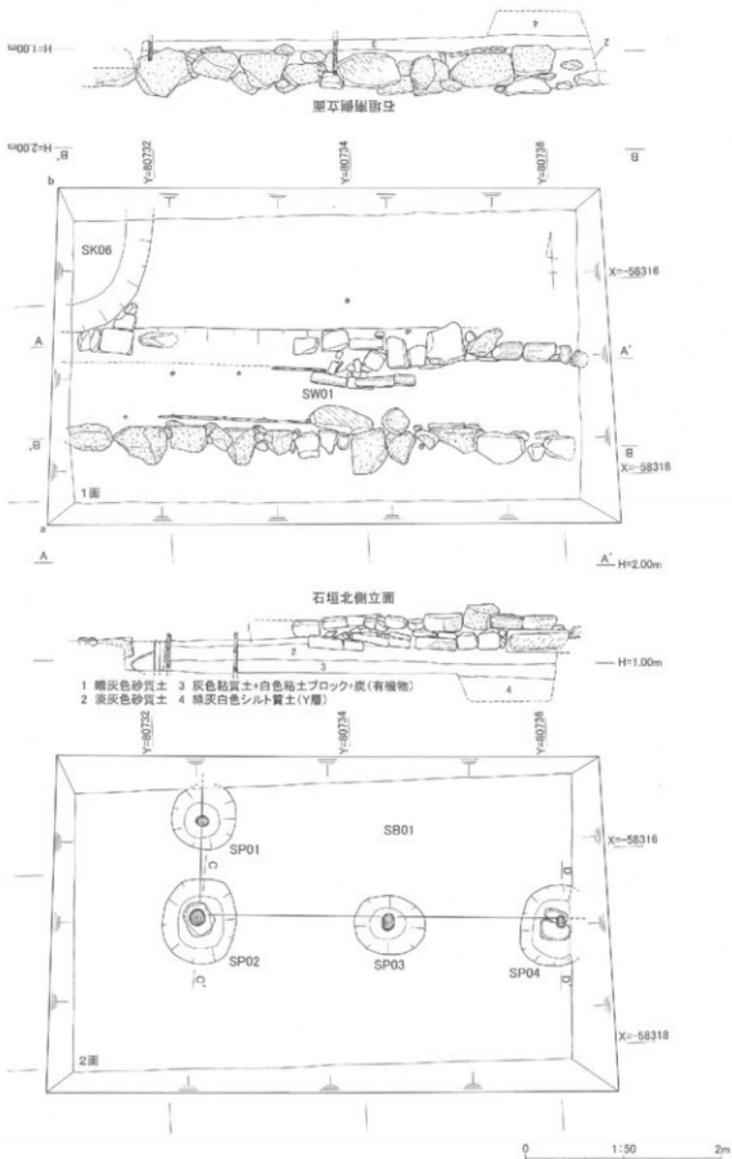
A-SK04…T10で検出した土坑で、規模は東西幅0.85m以上、南北幅2.2m以上、深さ0.16mを測る。土坑埋土中からの遺物出土量は多く、陶磁器や焼壺が出土した。遺構の性格は大形廃棄土坑である。

A-SK05…T12で検出した土坑で、規模は東西幅1.36m以上、南北幅2.1m以上、深さ0.4mを測る。土坑埋土中から陶磁器片が出土した。遺構の性格は大形廃棄土坑と捉えている。(検出1/4程度)

A-SK06…地下ビットで検出した土坑で、規模は南北長軸1.65m以上、東西幅0.6m以上、深さ0.34mを測る。埋土中から遺物は出土していないが、上層の乱れなどから攪乱土坑として捉えている。



第13図 A棟第1面検出遺構平面図・断面図(1:60)



第14図 A-地下ピット部分平面図(1面・2面)・屋敷境石垣立面図

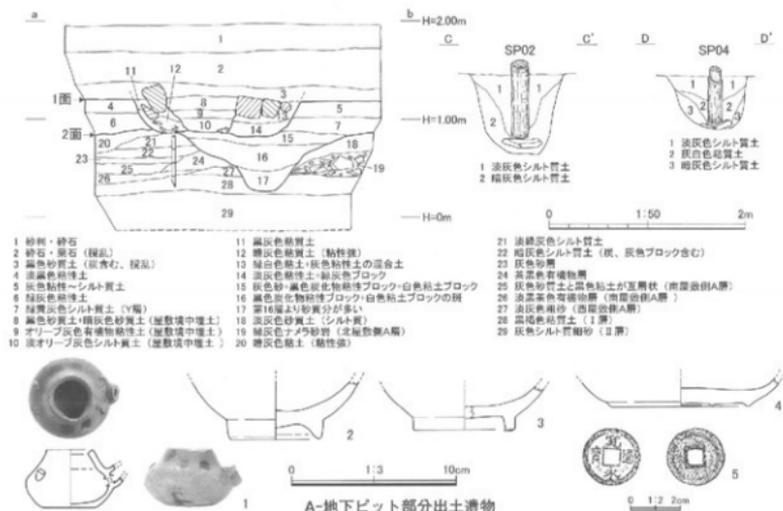
2. A-地下ピット部分の調査概要(第14図)

A-地下ピット部分については屋敷境の変遷を示す調査成果であったため、第1面・2面をまとめて示す。

現地表面標高1.96mから1.35mまでは近現代の擾乱を受けていた。擾乱土の掘り下げ後、第1面(標高1.34~1.24m)で屋敷境と考えられる石垣SW01を検出した。石垣の規模は、北側石垣東西5.1m・南側石垣東西5.2m、石垣の溝幅0.8m・深さ0.5mを測り、基軸方位はE-3.7°-Sであった。石材は、北側石垣では来待石(凝灰質砂岩)を主に使用、南側石垣では烏石(堅硬多孔質玄武岩)を主に使用し、2段の積込みが確認された。石垣を構築するための基盤層は、北側は灰色粘性~シルト質土(第5層)を、南側は淡黒色粘性土(第4層)を基盤層とし、屋敷境を境界として北側と南側とで土層が異なる様相を示していた。また、石垣の溝中では竹を柵状に組み、両側の石垣の前側に構築している痕跡を検出した。竹組は遮蔽物と考えられる。さらに石垣を取り除き、第2面(標高0.84m)で掘立柱建物SB01の柱穴を4穴(SP01~04)検出した。検出した規模は南北半間×東西約2間で、柱間隔はSP01~SP02南北間が0.97m、SP02~SP03東西間が1.97m、SP03~SP04東西間が1.78mを測り、北方・東方のトレンチ外へさらに拡がる可能性がある。

また、土層断面から、標高0.76mで石垣構築以前の素掘り溝(屋敷境)を確認した。断面のみの確認に留まったが、溝幅上端部1.7m・深さ0.6mを測り、I層を切り込んでU字状に掘り込まれていた。検出位置は、石垣の屋敷境よりもやや北寄りにずれている。

遺物は、すべて第1面で出土した。1はミニチュアの土瓶である。2は石垣北側で出土した肥前陶器の兵器手碗で、九陶Ⅲ期(1650~1690年代)を示す。3は石垣溝中から出土した肥前系陶器の碗である。4は石垣南側で出土した肥前磁器の皿で、見込みに五弁花を素描し、高台は蛇の目四型高台である。5は石垣南側の裏込石に混じって出土した寛永通寶で、1697~1781年に鋳造された「ハ貝寶」である。



3. A棟 第1面出土遺物（遺構内・遺構外）

A棟 第1面遺構内出土遺物（第15図）

A-SK04出土遺物

遺物はT10の廃棄土坑SK04埋土中から出土した。6は京信系陶器の碗である。7は肥前陶器の碗である。8は石見焼陶器の碗で、時期は18世紀末以降を示す。9は焼塩壺の身で蓋受けが突き出ないコップ形を呈し、刻印はない。焼塩壺編年から生産地年代は1750～1800年を示す。10は肥前磁器の広東碗で、九陶Ⅴ期（1780～1810年代）を示す。11は京焼の灰落しである。12は肥前磁器の皿で、高台内に「キ三十九」と焼接ぎ番号がある。13は肥前磁器の皿で、見込みは蛇の目釉割ぎである。九陶Ⅳ期（1690～1780年代）を示す。14は在地系陶器の鉢で、高台内に工具による刺突痕がある。15は肥前系磁器の波佐見焼で、蛇の目凹型高台の青磁染付折縁型大皿である。見込みは草文を施文し、内側面はへら彫りによって銘文を施す。九陶波佐見Ⅳ期（1650～1680年代）を示す。

A-SK05出土遺物

遺物はT12のSK05埋土中から出土した。16は信楽焼の腰白壺（四耳壺）で、時期は18世紀後半を示す。

A棟 第1面遺構外出土遺物（第16・17図）

ここでは第1遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。

A-地中梁調査出土遺物

17は京信系陶器の灯明皿で18世紀代を示す。18は肥前陶器の京焼風の碗で、九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780年代）を示す。19は布志名焼の碗（ぼてぼて茶碗）で、19世紀後半以降を示す。20は肥前磁器の皿で、九陶Ⅳ期（1690～1780年代）を示す。21は肥前磁器の菊皿で、九陶Ⅱ-2期（1630～1650年代）を示す。

A-T1 出土遺物

22は肥前磁器の仏飯器で外面に環珞文様が描かれる。23は肥前磁器の皿である。髷付は無軸で、見込みに五弁花のコンニャク印判が一部見られる。24は焼塩壺の身である。蓋受けが突き出すコップ形を呈し、刻印に「サカイ/泉州應生/御塩所」の銘がある。焼塩壺編年から生産地年代は1720～1750年を示す。25は肥前磁器の火入である。26は肥前磁器の碗で、見込みに五弁花を素描し高台内に「富貴長春」の銘がある。

A-T2 出土遺物

27は肥前磁器の碗の口縁部で、外面に水裂文様が描かれる。28は肥前磁器の陶胎染付の碗である。時期はいずれも九陶Ⅳ期（1690～1780年代）を示す。29は肥前磁器の灰落しである。

A-T5 出土遺物

遺物はY層中から出土した。30は肥前磁器の猪口で、九陶Ⅳ期（1690～1750年代）を示す。31は京信系陶器の碗で、外面に注連縄文様が描かれる。

A-T6 出土遺物

32は在地系陶器の碗、33は肥前磁器の陶胎染付の菊皿片、34は土鍾である。

A-T7 出土遺物

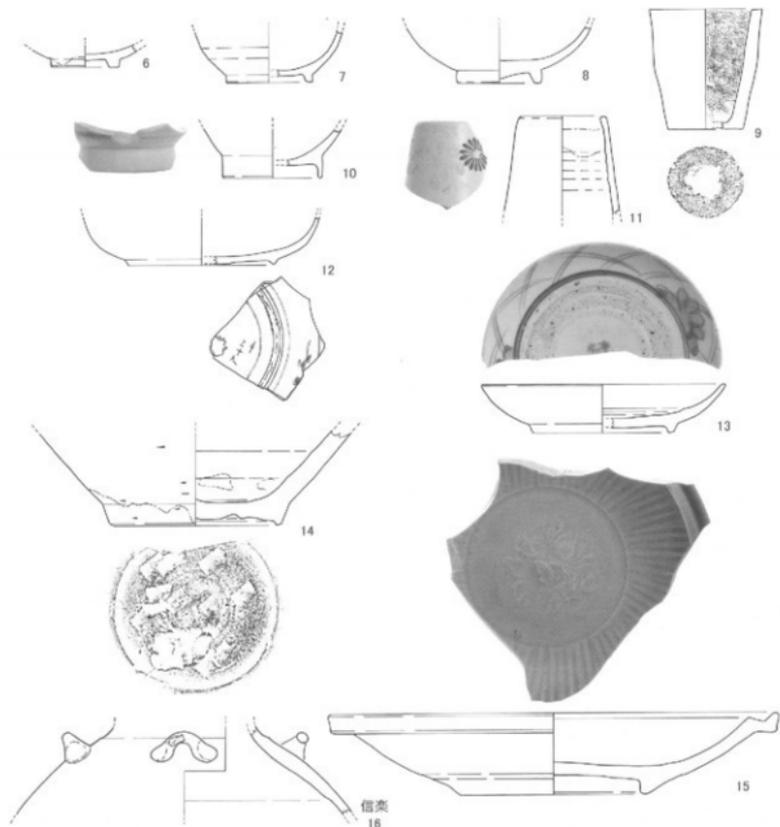
35は肥前磁器の碗で口縁部内面に四方禪、外面に草花文様を描く。九陶Ⅳ期（1780～1860年代）を示す。

A-T8 出土遺物

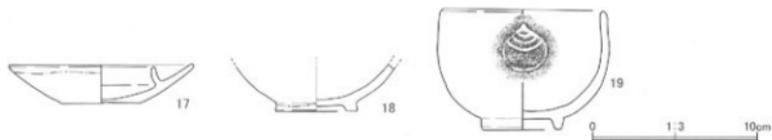
36はロクロ成形の土師器皿で、灯明に使用された痕跡がある。37は肥前磁器の碗で高台内に「大明」の銘が見られ、九陶Ⅲ期（1650～1690年代）を示す。38は広東碗で、九陶Ⅴ期（1810～1840年代）を示す。

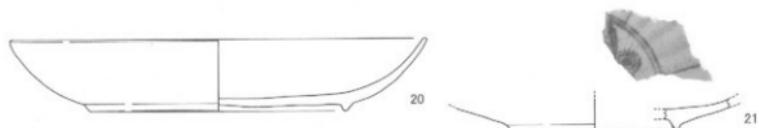
A-T12出土遺物

39は肥前磁器の広東碗蓋、40は肥前磁器の広東碗である。時期は九陶Ⅴ期（1810～1840年代）を示す。

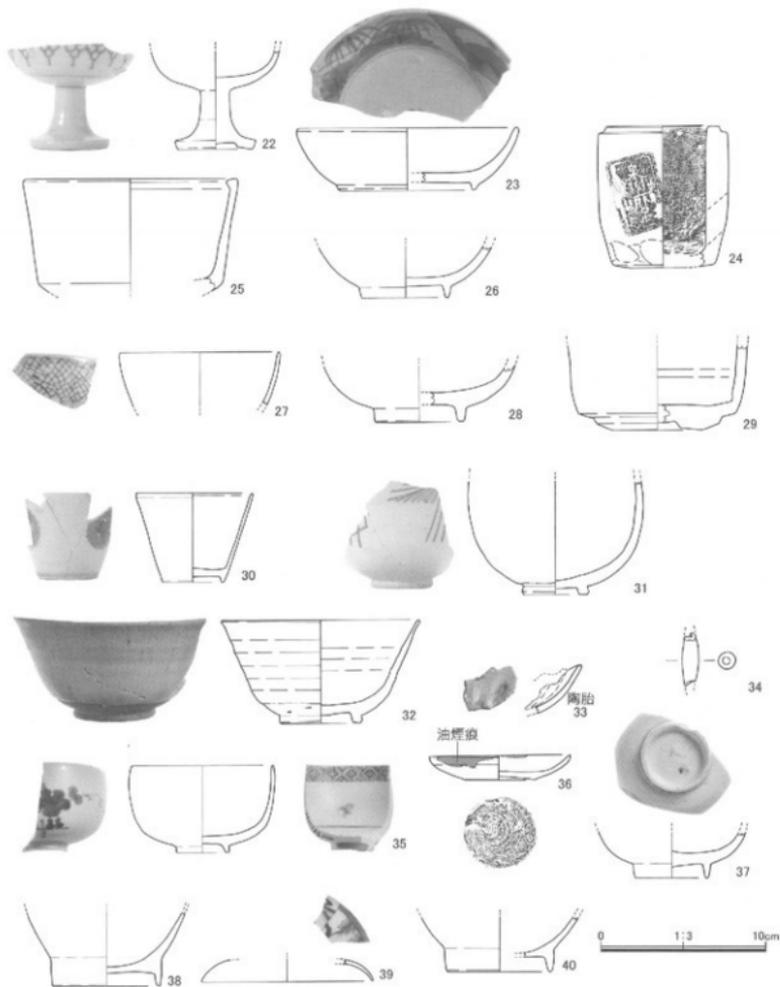


第15図 A棟第1面遺構内出土遺物





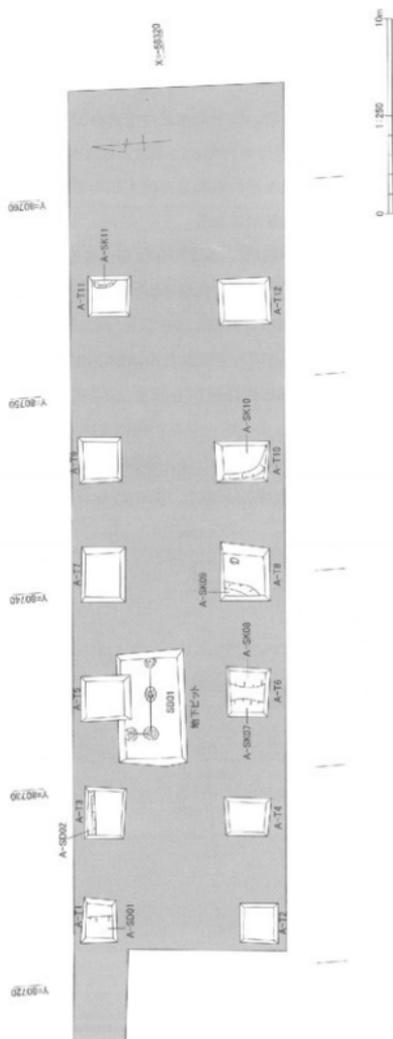
第16図 A棟第1面地中梁調査出土遺物



第17図 A棟第1面遺構外出土遺物

第3節 A棟 第2面調査成果

標高0.60m付近で城下町造成当初の盛上層(A層)を基盤とする第2遺構面を検出した。この遺構面では、上坑を5基、溝を2条、掘立柱建物の柱穴を4穴検出している。以下に遺構の説明を詳述する。



第18図 A棟第2遺構面平面図

1. A棟 第2面検出遺構(第18・19図)

A-SD01…T1で検出した溝状遺構SD01は、トレンチ内南北方向に伸び、西方への落ち込みを確認している。検出規模は東西幅1.0m以上、深さ0.5m以上を測る。検出部分は溝の端部のみで、トレンチ外東西・南北へと広がる様相を示す。

A-SD02…T3で検出した溝状遺構SD02は、トレンチ内東西方向に伸び、北方への落ち込みを確認している。検出規模は東西幅2.25m以上、南北幅0.38m以上、深さ0.4mを測り、さらにトレンチ外へと広がる様相を示す。また、埋土には瓦片を含んでいた。

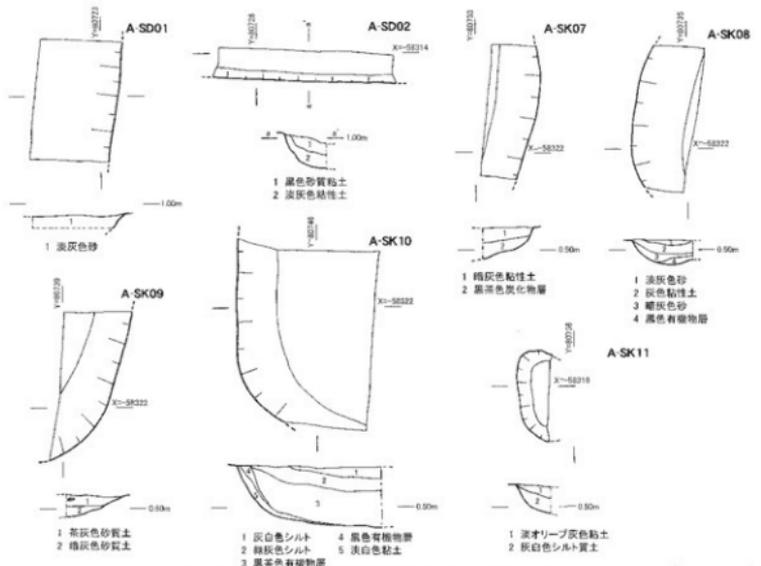
A-SK07…T6で検出した土坑で、検出規模は東西幅0.6m以上、南北幅1.65m以上、深さ0.34mを測る。埋土中から少量の陶磁器や下駄などの木製品が出土したことから、廃棄土坑と考えられる。さらにトレンチ外西側へ広がる様相である。

A-SK08…T6で検出した土坑で、検出規模は東西幅0.76m以上、南北長軸1.8m以上、深さ0.34mを測る。埋土中から遺物は出土しておらず、性格不明土坑として捉えた。

A-SK09…T8で検出した土坑で、検出規模は東西幅0.74m以上、南北幅1.85m以上、深さ0.25mを測る。埋土中から陶器片・土師器片・漆碗・下駄などの遺物が出土し、廃棄土坑と考えられる。

A-SK10…T10で検出した土坑で、検出規模は東西幅1.7m以上、南北長軸2.2m以上、深さ0.72mを測り、トレンチ内のほぼ全体を占める。さらにトレンチ外へと広がる様相を示す大土坑である。埋土には黒茶色有機物層が厚く堆積していたが、遺物は出土しなかった。(検出1/4程度)

A-SK11…T11で検出し、南北幅1.1m、東西幅0.4m以上、深さ0.3mを測る楕円形を呈する土坑である。



第19図 A棟第2面検出遺構平面図・断面図(1:60)

0 1m

2. A棟 第2面出土遺物（遺構内・遺構外）

A棟 第2面遺構内出土遺物（第20図）

A-SD02出土遺物

遺物はT3の溝状遺構SD02から出土した。41は肥前陶器の碗で、九陶Ⅱ期（1610～1650年代）を示す。42は肥前陶器の碗で、九陶Ⅰ-2～Ⅱ期（1594～1650年代）を示す。

A-SK07出土遺物

遺物はT6の廃棄土坑SK07埋土中から出土した。43は丸型連菌下駄、44は杓子、45は曲物の底板である。

A-SK09出土遺物

遺物はT8の廃棄土坑SK09埋土中から出土した。46は京都承手づくね成形の土師器皿である。口縁部に油煙痕が付着するため、灯明に使用されたものと思われる。47は肥前陶器の碗の口縁部で、九陶Ⅰ-2期（1594～1610年代）を示す。48は肥前陶器の砂目皿で、九陶Ⅰ-2期（1594～1610年代）を示す。49は肥前陶器の土瓶の注口である。50は肥前陶器の皿で、九陶Ⅰ-2期（1594～1610年代）を示す。51は角型差込下駄である。52は漆碗で、外面に草花文様を描く。

A棟 第2面遺構外出土遺物（第21図）

ここでは第2遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。

A-T4出土遺物

53は肥前陶器の呉器手碗で、九陶Ⅲ期（1650～1690年代）を示す。

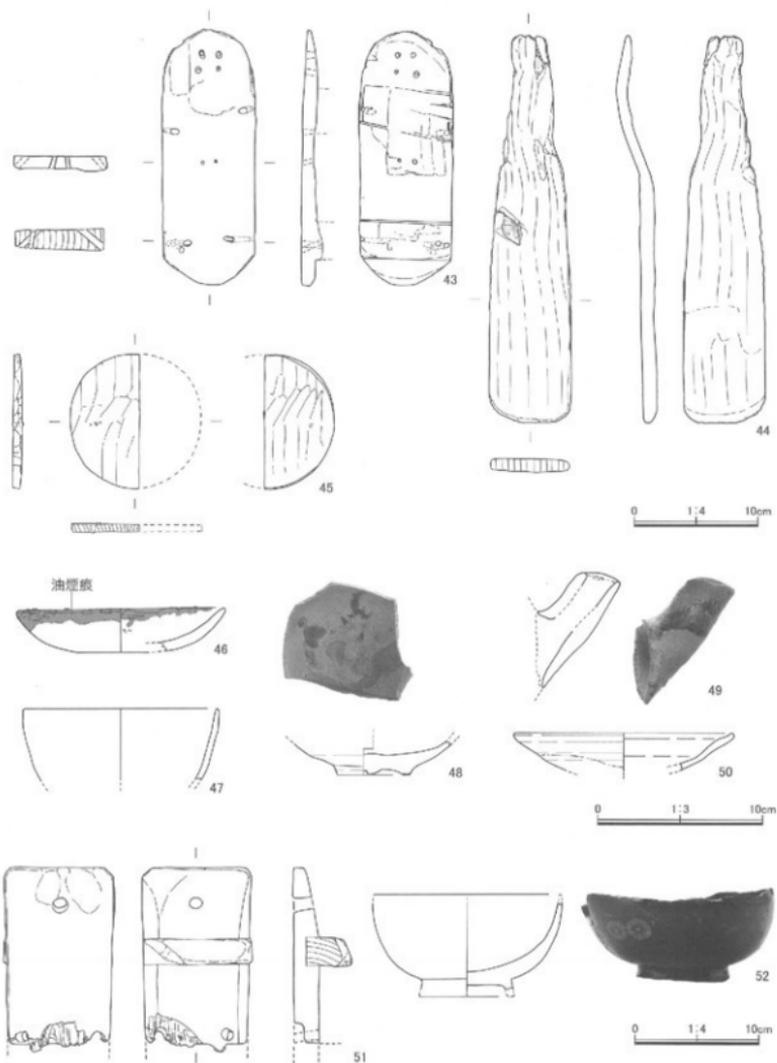
A-T6出土遺物

54は掃り目の磨滅した肥前陶器の掃鉢で、時期は九陶Ⅱ期（1630～1650年代）を示す。55は獣骨で、イヌの右前足の尺骨（上）、左前足の上腕骨（下）である。

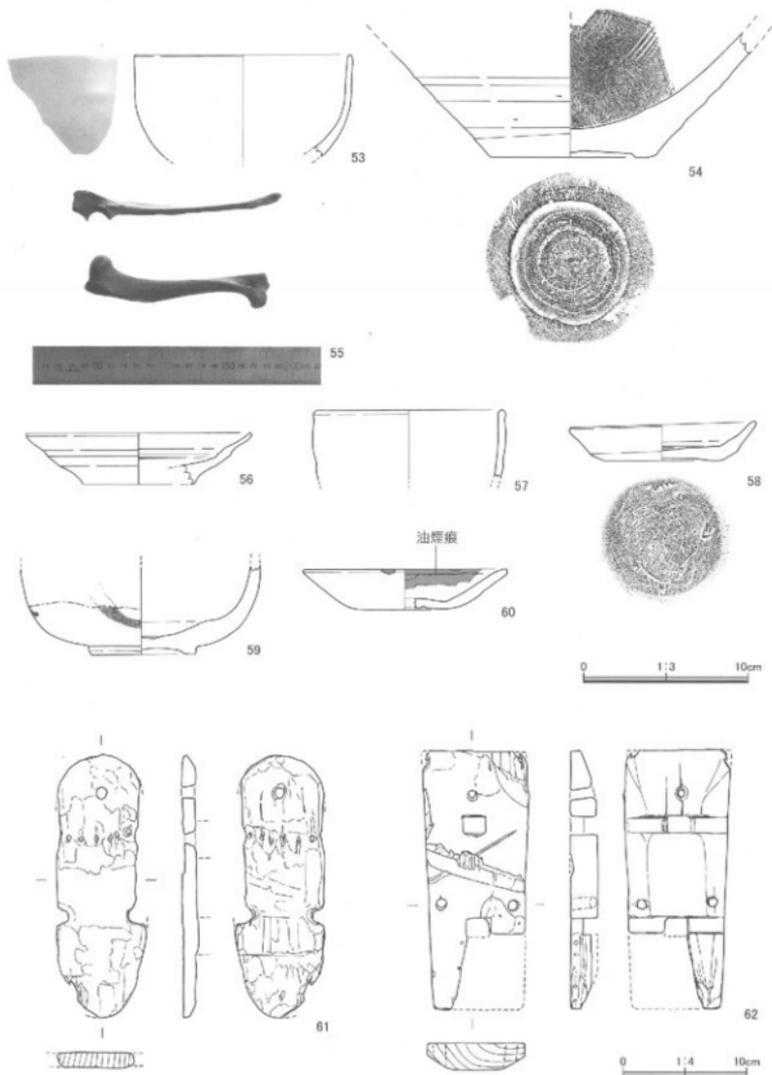
A-T8出土遺物

遺物はI層上面から出土した。56は肥前陶器の皿で、九陶Ⅱ期（1610～1650年代）を示す。57は肥前陶器の碗で、九陶Ⅰ-2～Ⅱ期（1594～1650年代）を示す。58はロクロ成形の土師器皿で、底部に糸切り痕跡がある。59は肥前陶器の鉢で、外面に鉄絵が描かれる。九陶Ⅱ-1期（1610～1630年代）を示す。60は京都承手づくね成形の土師器皿で、灯明に使用された痕跡がある。61は丸型連菌下駄、62は角型差込下駄である。





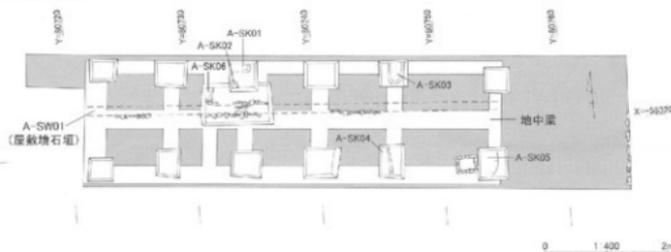
第20図 A棟第2面遺構内出土遺物



第21図 A棟第2面遺構外出土遺物

第4節 A棟調査成果のまとめ

A棟 第1遺構面



第1遺構面は、現地表面から攪乱土を除去して精査を行い、標高1.20～1.00mで検出した。

以下に第1遺構面の調査成果として、検出した主な遺構・基盤となる造成土・出土遺物・第1遺構面の年代観について示しておく。

検出した主な遺構としては、屋敷境石垣SW01が挙げられる。屋敷境石垣（溝）は調査区内中央部の東西方向に検出した。基軸方位はE-3.7°-Sで、この軸は市道母衣町大橋川線の南北道路軸に直交している。これまでの松江城下町遺跡発掘調査で検出された建物跡や屋敷割の溝、道路などの基軸の傾きとほぼ同様である。屋敷境は1条の溝で、両側に2段の石垣が積み込まれ、使用される石材は屋敷地ごとに相違がみられた。また、屋敷境石垣（溝）は境界であるとともに排水機能の性格をもち、調査地西側から東側への傾斜を持たせており、東側道路に面する石組水路への排水を行っていたものと考えられる。

また、この遺構面では大形の土坑を3基検出している。埋土中に瓦片や陶磁器片を含み、ゴミなどを投棄して埋められた土坑である。検出位置は屋敷境を境界とした屋敷の縁辺部であり、屋敷の主体部以外のところをゴミ捨て場として利用していたものと捉えている。土坑埋土中に19世紀代の陶磁器の破棄が目立つものも含まれ、屋敷替えに伴う屋敷の解体による廃棄土坑と考えられるものも検出している。

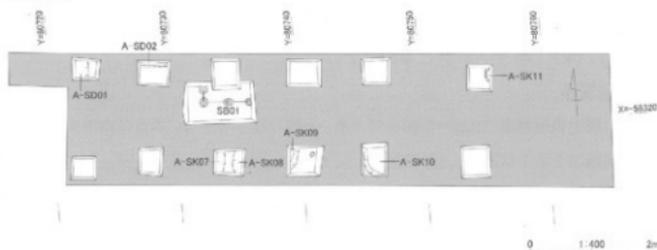
その他、地中梁調査時にA-T12西隣で検出した方形石組井戸SE01があるが、井戸枠の中心部に水汲み上げのための真鍮管が残っていたことから、近代まで使用していた可能性がある。

基盤となる造成土は、黄灰色砂質土や灰色シルト質土などのY層を主な基盤層としているが、屋敷境を境界として北側は灰色粘性～シルト質土を、南側は淡黒色粘性土を基盤層とし、調査区内の北側と南側とで土層が異なる地点も確認している。これらは、屋敷地ごとそれぞれに造成を行っていたことを示すものとして捉えている。

遺物は、肥前磁器が多く出土し、特にコンニャク印判の皿や広東碗などが目立ち、九陶Ⅳ～Ⅴ期のものが中心に出土した傾向にある。土器器皿は在地系で糸切り痕をもつものが多く、その他には泉州系焼塩壺や在地の布志名焼などが出土した。

これらのことを踏まえ、出土遺物の概観から、第1遺構面は18世紀代（松平中期）から19世紀中頃（明治時代前半）までの遺構面であると考えられる。

A棟 第2遺構面



第2遺構面は、第1遺構面から0.40mほど掘り下げて精査を行い、標高0.75～0.60mで検出した。

検出した主な遺構として、掘立柱建物跡SB01が挙げられる。SB01の建物基軸方位は、E-3.7°-Sを示し、この基軸は、第1遺構面で検出した屋敷境石垣と同様の傾きであった。

また、地下ピット部分の調査において、断面での確認に留まったが、第1面で検出した石垣の屋敷境以前は、素掘り溝の屋敷境であった可能性を示していた。検出位置は、屋敷境石垣よりもやや北寄りに検出した。この素掘り溝は、平面的に復元すると先述した掘立柱建物跡と重複する位置で検出していることから、時期差が生じているものとして捉えている。まず、素掘り溝が機能しており、廃絶段階に溝が埋め戻され、その後掘立柱建物を構築したものと考えられる。調査地付近の類例から、松江城下町遺跡（松江裁判所：母衣町68）の発掘調査では、堀尾期に機能していた素掘りの屋敷境溝が廃絶した段階で一度埋め戻され、さらに埋め戻した溝と同じ位置に掘立柱建物を構築していたという調査事例がある。今回検出した素掘り溝と掘立柱建物の関係性も同様のもので推察する。

基盤となる造成土は、A層を主な基盤層としているが、屋敷境を境界に北側では緑灰色砂岩（松江層のブロック状砂岩）を使用し、南側ではシルト質土とI層の融和土を使用するといった屋敷地ごとに相違がみられた。屋敷境北側A層のブロック状砂岩について、松江城下町遺跡（殿町191-13外）での検出事例があるが、現段階ではその地点のみでしか確認されていない。殿町191-13地点は、松江城に一番近い場所に位置し、ブロック状砂岩は築城段階に内堀を掘削した際の掻き揚げ土であると考えられるため、城下町初期造成土としての使用に違いない。今回の調査地（母衣町127-2）は内堀から約650m近く離れている地点であるため、土の持ち込み過程が疑問となる。仮に土の供給地点を調査地南側の京橋川とし、京橋川を外堀として整備する段階に掘削して掻き揚げた土を造成土に使用したと想定する場合には、それなりの土量が得られたと思われるが、推測の域を脱しない。A層以下の旧地表面（I層）の検出面は標高0.45～0.40mである。

遺物は、肥前陶器の占める割合が多くなり、九陶I-2期が中心に出土し、II期のものも含む。出土層位が城下町初期造成土直上であることから、堀尾期であることに問題ない。中国産磁器は出土せず、土師器皿は京都系の手づくね成形のものが目立つ。17世紀中頃の遺物も出土していることから、松平前期まで使われ続けていた可能性もある。出土遺物の概観から、第2遺構面は17世紀前半（堀尾期）から17世紀中頃（松平前期）までの遺構面であると考えられる。

第4章 B棟の調査成果 [松江城下町遺跡 (母衣町128)]

第1節 B棟の基本層序と調査手法

1. B棟基本層序

調査区内の現地表面標高は2.20～2.00mである。B棟の基本層序は、調査区内中央部で東西方向に設定した上層横断面をもとに示す。(第22図)

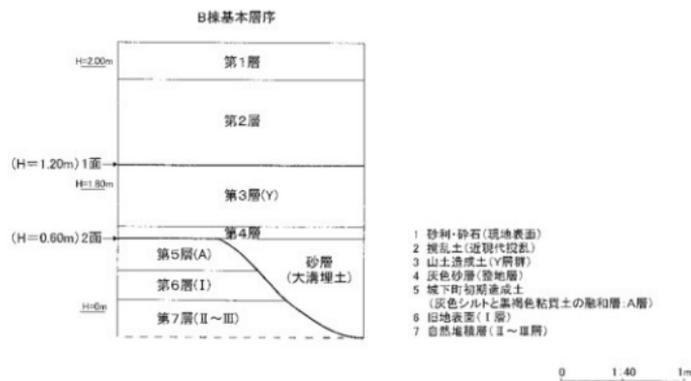
B棟調査区内では、計7層が確認された。上層から、第1層は砂利・碎石による現代の整地層、第2層は近現代遺物を含む擾乱層、第3層は整地層である山土造成土(Y層)、第4層は淡灰色シルト質土～灰色粘性土の整地層、第5層は城下町初期段階の造成土と考えられる灰色シルトと黒褐色粘質土の融和土(A層)、第6層は黒褐色粘質土の旧地表面(Ⅰ層)、第7層は灰色～青灰色細砂層の自然堆積層(Ⅱ～Ⅲ層)である。

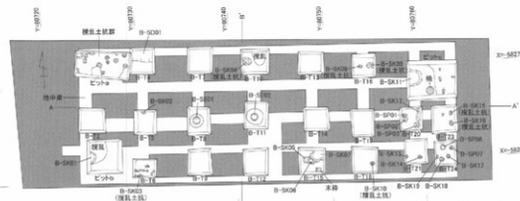
また、調査区内北側東西列の調査区(B-T1～ピットe)及び調査区内東側南北列の調査区(ピットc～B-T24)において、A層から掘り込まれた素掘りの大溝の埋土と考えられる灰色砂層を検出している。

基本層の層厚は、地表面から順に第1層が30cm、第2層の擾乱層が70cm、第3層のY層が50cm、第4層が10cm、第5層のA層が25cm、以下は自然堆積層で第6層のⅠ層が20～25cm堆積し、その下は第7層のⅡ～Ⅲ層である。B棟調査区内では、事前の試掘結果などから2面の生活面を調査することとし、それぞれ上から1面、2面と呼称し遺構の確認及び調査を行った。

Y層についてはA棟調査成果と同様に数単位に細分可能ではあるが、現段階において明確な時期区分を示していないため、本報告ではY層群として捉えることとした。なお、各層の呼称は他の層と区別するため、便宜的に山土造成土=Y層、城下町初期造成土=A層、Ⅱ地表面=Ⅰ層、自然堆積層=Ⅱ～Ⅲ層とした。

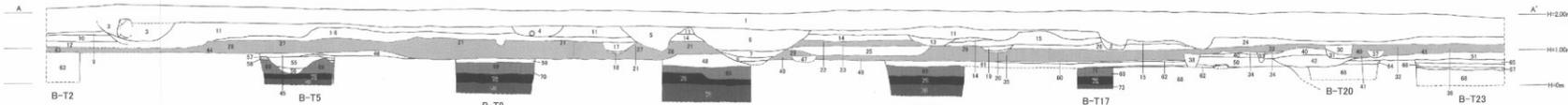
さらに調査成果として、B棟調査区の全体土層を把握するために東西土層横断面及び南北上層横断面を示しておく。(第23図)





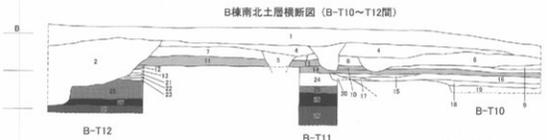
B棟調査区平面図

B棟東西土層横断面 (B-T2~T23間)



素掘りの大溝

- | | | | |
|--------------------------|-------------------------------|---|-----------------------------------|
| 1 砂利・砕石・コンクリート | 21 褐色砂質土・淡白色粘質ブロック(Y層) | 40 淡黄灰白色シルト質土・緑白色粘土ブロック
→黄褐色土ブロックの混入 | 58 淡黄灰シルト質土・黒褐色粘質土 |
| 2 淡茶灰色砂質土(覆土) | 22 黄灰色シルト質土(Y層) | 41 淡灰色砂質土 | 59 白色シルトブロック+灰色粘質土(種子細かい)が互層状に混じる |
| 3 緑土 | 23 緑色粘質ブロック+褐色粘土ブロックの混入(Y層) | 42 緑白色シルト質土・灰色砂 | 60 淡茶灰色粘土・黄色粘土ブロック |
| 4 茶灰色土(覆土) | 24 淡灰~褐色砂質土 | 43 淡灰色粘性土+白色・緑灰色粘質ブロックの混合土 | 61 灰色シルトと灰色粘土の混合土 |
| 5 茶褐色砂質土・黒チツブ(土埃埋) | 25 褐色粘質土・灰白色粘土ブロックの混入(土埃か) | 44 緑灰~黄灰色シルト質土+白色粘土ブロック(Y層) | 62 茶~黒色粘土(粘着層)2層 |
| 6 砕石・コンクリート+黒色砂質土(覆土) | 26 緑灰~黄灰色シルト質土+白色粘土ブロック(Y層) | 45 灰色砂+淡黄白色シルト(酸化後黄色) | 63 灰色砂(湧水無し) |
| 7 黒色砂 | 27 淡灰褐色砂質土 | 46 オリーブ灰色粘土(粘性強)+白色粘土ブロックの混入 | 64 黄灰色シルト質土・黒褐色粘質土(黒褐色粘質土は稀少) |
| 8 黄灰色シルト質土 | 28 灰色粘質土+茶灰色粘質ブロックの混合土(Y層) | 47 ゴミ層(大瓶等含む) | 65 オリーブ灰色粘土(粘性強) |
| 9 淡オリーブ灰色砂質土(炭チツブ含む) | 29 オリーブ灰色シルト質土 | 48 灰色シルト質土 | 66 灰色砂 |
| 10 白灰色砂質土(シルト質含む) | 30 褐色ブロック+灰色砂質土 | 49 淡灰色シルト質土+黄灰色粘性土・灰色粘土の混合土
→黒く締まる。密地層か) | 67 緑灰色粘土 |
| 11 暗褐色砂質土(覆土) | 31 淡緑灰色砂質土 | 50 第40層に貼る。粘性強い | 68 黄灰色シルト質細砂+黒褐色粘質土(A層) |
| 12 淡茶灰色粘土(炭・遺物含む) | 32 褐色、白色、褐色、緑灰白色粘土ブロックの混合土 | 51 黄灰色シルト質土+淡灰色砂 | 69 黒褐色粘質土+緑灰色粘土・灰色シルト質細砂 |
| 13 暗褐色砂質土+炭チツブ(遺物含む) | 33 黄灰色シルト質土(Y層) | 52 緑白色シルト質土 | 70 黒褐色粘質土+黄色粘土(やや締まる) |
| 14 茶褐色砂質土 | 34 淡灰白色シルト質土 | 53 淡黄灰シルト質土 | 71 黒褐色粘質土+やや締まる |
| 15 緑茶~暗褐色砂質土+炭チツブ | 35 茶色砂+褐色粘土+赤味灰色粘土がマarmor状に入る | 54 黒色砂と第52層が互層状に入る | 72 黒褐色粘質土(I層) |
| 16 オリーブ灰色砂質土(土埃埋) | 36 オリーブ灰色粘質粘土 | 55 淡オリーブ灰色粘質土 | 73 灰色細砂(I層) |
| 17 暗褐色有機質腐敗(炭)物を含む。土埃埋土) | 37 黒色砂粘土 | 56 暗灰色シルト質土+黒褐色粘質土 | |
| 18 淡黄灰色シルト質土 | 38 灰色粘性シルト | 57 淡黄白色シルト質土+白色(灰色粘土ブロックの混入) | |
| 19 淡茶褐色砂質土 | 39 灰色粘砂+緑白色シルト質土 | | |



素掘りの大溝

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 砂利・砕石 | 15 青白色シルト質土(固く締まる) |
| 2 黒色砂質土(塊、コンクリート、タイル等含む:近現代埋) | 16 黄灰色シルト質土+白色、黒灰色粘土ブロック |
| 3 黒褐色粘質土+炭チツブ(土埃埋) | 17 灰色粘質土・灰色粘性土 |
| 4 暗褐色茶褐色土(覆土) | 18 淡灰色粘質土 |
| 5 白灰色粘質シルト+黄灰色粘質シルトの混入 | 19 暗灰~淡黄白色シルト質土(Y層) |
| 6 淡茶褐色土(酸化物混入:覆土) | 20 暗灰~淡黄白色シルト質土(Y層) |
| 7 茶褐色砂質土 | 21 灰色砂 |
| 8 緑灰色シルト質粘性土(覆土) | 22 淡灰色砂+淡灰色粘質土+淡白色粘土の混合土 |
| 9 暗褐色粘土 | 23 緑褐色粘土 |
| 10 暗褐色粘性土 | 24 灰色シルト質土 |
| 11 褐色砂質土・淡白色粘質ブロック(Y層) | 25 黄灰色シルト質細砂+黒褐色粘質土(A層) |
| 12 淡灰色粘質土・灰色砂 | 26 黒褐色粘質土(I層) |
| 13 茶褐色砂 | 27 灰色細砂(I層) |

凡例

● Y層群 (城下町造成土:松平期)
● A層 (城下町初期造成土:堀尾期)
● I層 (旧地表面:城下町造成以前)
● II~III層 (自然堆積層)

第23図 B棟調査トレンチ・地中架配置図

2. 調査の手法

発掘調査対象地は、松江城本丸の南東約645mに位置し、市道米子殿町線の東西道路と市道母衣町大橋川線の南北道路が交わる交差点の南西角地に該当する近世城下町遺跡の屋敷跡である。今回の本発掘調査において、以下の4点に絞って調査を実施した。

- ① 当該地の江戸時代前期から幕末にわたる土地利用の変遷を把握する。
- ② 土層堆積の層序を横断土層図の作成により把握し、屋敷造成土の利用方法を解明する。
- ③ 遺構から確認される屋敷の空間構成を把握する。
- ④ 旧地表面（I層）の検出標高を確認して比較検討を行い、城下町造成以前の地形を復元する。

調査区の設定は、基礎杭工事部分において、杭打ちにより遺構面に影響のある部分に2m×2mの調査区を20箇所（B-T2、B-T4～T18、B-T20～21、B-T23～24）、ピットa部分（B-T1含む）に4.5m×3.5mの調査区を1箇所、ピットb部分（B-T3含む）に4.0m×2.0mの調査区を1箇所、ピットc部分（B-T19,22含む）に6.0m×4.5mの調査区を1箇所設定して行った。地中梁工事部分は掘削深度床面の第1遺構面までの調査を行った。

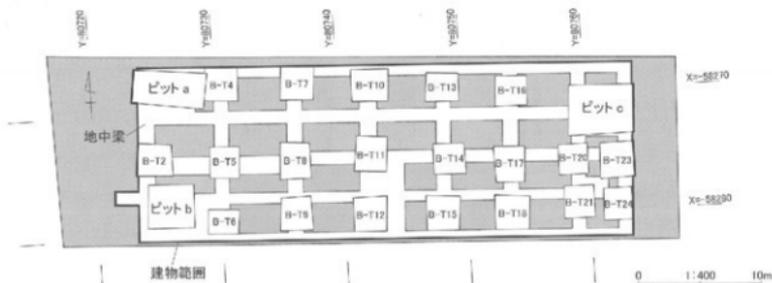
調査面積は、B棟建物予定地内767㎡のうち、地下に影響を及ぼす基礎杭・地下ピット工事部分191.1㎡と地中梁工事部分207.4㎡を対象としている。

基礎杭部分及び地下ピット部分は、平成24年8月8日から調査を開始し、同8月29日に調査を終了した。地中梁部分の調査は掘削工事に併せて9月27日から調査を開始し、10月11日に調査を終了した。

B棟の現況GLは標高2.20～2.00mである。遺構面については、標高1.20～1.10m付近でシルト質の山土造成土（Y層）を基盤とする第1遺構面を検出した。この遺構面では、土坑（擾乱土坑・ゴミ穴含む）を30基、ピットを5穴、溝を1条、来待石裂井戸を2基、桶を1個検出している。

次いで、標高0.80～0.60m付近で城下町造成当初の盛土層（A層）を基盤とする第2遺構面を検出した。この遺構面では、土坑を4基、柱穴を5穴、素掘りの大溝の落ち込み肩部及び合流地点を検出している。

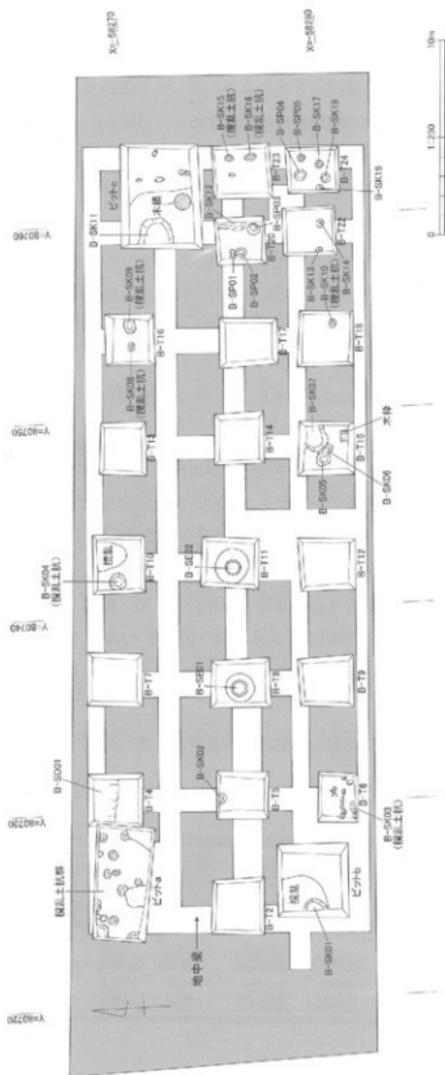
各遺構面の調査成果は次節に委ね、屋敷地の特定は第6章-第2節-2で詳述する。



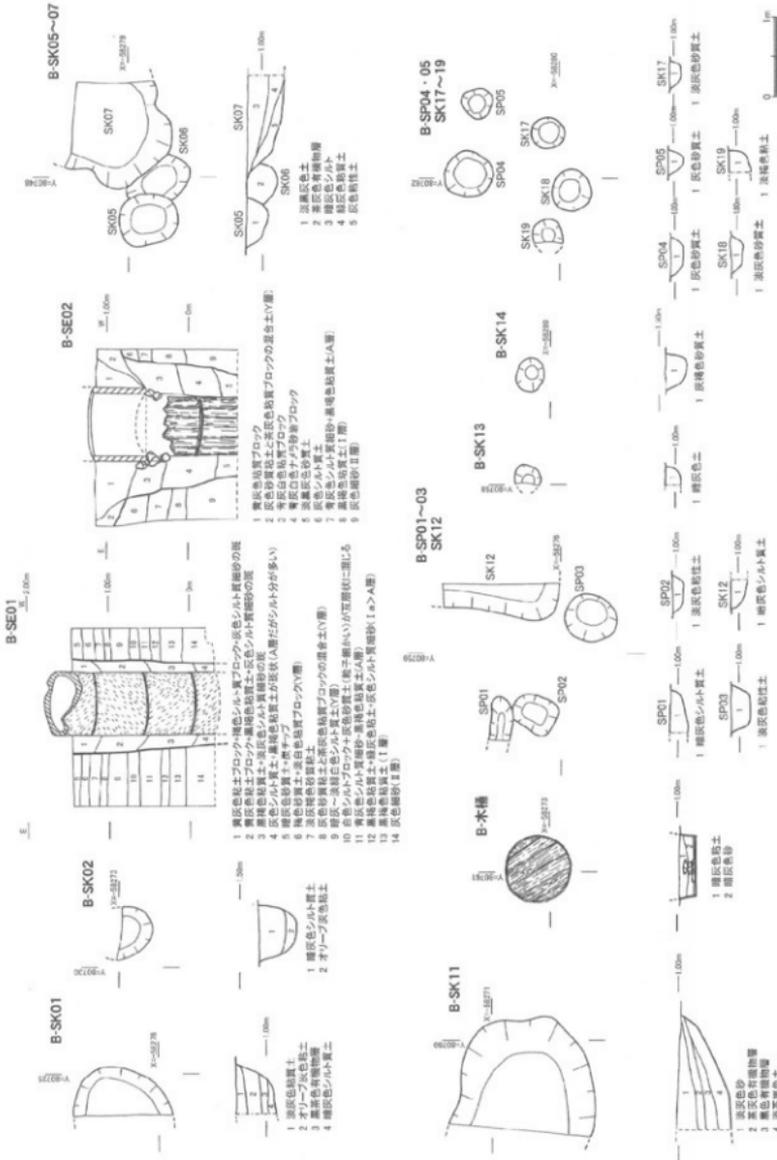
第24図 B棟調査区・地中梁配置図

第2節 B棟 第1面調査成果

標高1.20~1.10m付近で山土造成土(Y層)を基盤とする第1遺構面を検出した。この遺構面では、土坑を30基、ピットを5穴、溝を1条、井戸を2基、桶を1個検出している。以下に遺構の説明を詳述する。



第25図 B棟第1層構面平面図



第26図 B種第1面検出遺構平面図・断面図 (1:60)

1. B棟 第1面検出遺構 (第25・26図)

- B-SK01**…ピットbで検出した土坑で、規模は東西幅0.60m以上、南北幅1.10m、深さ0.50mを測る。土坑埋土中に有機質土の堆積が確認され、陶器や播鉢、漆桶などを含む廃棄土坑である。
- B-SK02**…T5で検出した土坑で、規模は東西幅0.60m、南北幅0.35m以上、深さ0.46mを測る。土坑中からの遺物の出上はなかったため、性格不明土坑である。
- B-SE01**…T8で検出した、直径0.80mを測る円形の井筒をもつ井戸跡である。井筒の石材は来待石（凝灰質砂岩）を使用していた。井戸は掘方を伴い、標高0m以下の自然堆積層までの掘り込みを確認した。
- B-SE02**…T11で検出した、直径0.88mを測る円形の井筒をもつ井戸跡である。井戸の上方は来待石製の井筒で、下方は木製の井枠で構成されていたため、改修あるいは造り直しの可能性がある。井戸は直径1.8mの掘方を伴い、何段階かに分けて埋め戻している様子うかがえた。
- B-SK05～07**…T15で検出した3基の土坑は、いずれも埋土中から陶磁器片や木製品が出土したため、廃棄土坑と考えられる。SK06はSK05・07と切り合い、SK05・07よりも古い様相を示す。
- B-SK11**…ピットcで検出した土坑で、規模は東西幅1.4m以上、南北幅1.7m、深さ0.7mを測る。埋土中からは陶磁器や木製品が出土した。やや大形の廃棄土坑と捉えている。
- B-木桶** からは陶磁器や木製品が出土した。木桶は、直径0.80m、深さ0.20mを測る。検出したのは桶の底部分で、上部は土層の攪乱により、欠損していた。桶中埋土から陶器が出土している。
- B-SP01～03**…T20で検出したSP01～SP03は、直径0.40～0.50m、深さ0.20mを測るピットである。
- SK12** SK12は、東西幅0.35m以上、南北幅1.40m以上、深さ0.20mを測る。検出した形状から土坑の一部であると考えられる。
- B-SK13,14**…T21で検出し、直径0.40m、深さ0.25mを測る土坑である。埋土中には遺物は含まれていない。
- B-SP04,05**…T24で検出したSP04・05は、直径0.40～0.50m、深さ0.18mを測る円形ピットである。
- SK17～19** SK17～19は、いずれも直径0.40m、深さ0.20mを測る円形～楕円形を呈する土坑であるが、性格不明土坑であった。

2. B棟 第1面出土遺物 (遺構内・遺構外)

B棟 第1面遺構内出土遺物 (第27図)

B-攪乱土坑出土遺物

遺物はピットaの攪乱土坑中から出土した。63は肥前磁器の碗で、九陶Ⅲ期 (1650～1690年代) を示す。

B-SK01出土遺物

遺物はピットbの廃棄土坑SK01埋土中から出土した。64は瀬戸産陶器の天目茶碗の口縁部片である。内外面に鉄軸がかかる。65は越前産陶器の播鉢のL縁部である。66は漆桶の蓋で、67は漆桶である。

B-SD01出土遺物

遺物はT4の溝状遺構SD01から出土した。68は肥前陶器の砂目皿で、九陶Ⅲ期 (1650～1690年代) を示す。

B-SK05、SK06、SK07出土遺物

遺物はT15の廃棄土坑から出土した。69はSK05埋土中から出土した京都系手づくね成形の土師器Ⅲ

で、灯明に使用された痕跡がある。70は丹波産陶器の播鉢、71は肥前磁器の碗で、外面の高台までと内面口縁部に鉄軸がかかる。いずれもSK06埋土中から出土している。72は櫛で、SK07から出土した。

B-SK11、木桶中出土遺物

遺物はピットcの廃棄土坑SK11、木桶中から出土した。SK11埋土中から73～75、80、81が、木桶中から76～79が出土した。73は備前焼の陶器の浅鉢、74は中国磁器（漳州窯系）の皿、75は肥前磁器の碗で高台内に「大明年製」の銘がある。76は肥前磁器の紅入、77は肥前磁器の蓋でいずれも九陶Ⅳ期（1690～1780年代）を示す。78は京信系陶器の碗、79は京信系陶器で、半月口形の小木注である。80は丸梨差込下駄、81は曲物の底板である。

B棟 第1面遺構外出土遺物（第28・29図）

ここでは第1遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。

B-地中梁調査出土遺物

82～84は地中梁調査時に出土した遺物である。82はB-T11～T14間掘削中に出土した肥前陶器の皿で、九陶Ⅲ期（1650～1690年代）を示す。83はB-T14～T17間掘削中に出土した肥前磁器の碗で、九陶Ⅱ-2期（1630～1650年代）を示す。84はB-T11～T14間掘削中に出土した折敷である。

B-T2出土遺物

遺物はY層中から出土した。85は肥前磁器の碗で、九陶Ⅲ期（1650～1690年代）を示す。

B-ピットb出土遺物

86は在地系陶器（楽山焼か）の蓋である。87は肥前系磁器の波佐見焼の碗で、九陶波佐見Ⅴ-2期（1750～1770年代）を示す。88は肥前磁器の小碗で、外面に源氏香文様を描く。九陶Ⅳ期（1740～1780年代）を示す。

B-T6出土遺物

遺物はY層中から出土した。89は肥前陶器の砂目皿で、九陶Ⅱ～Ⅲ期（1630～1690年代）を示す。

B-T8出土遺物

90は在地系磁器の皿である。91は在地の布志名焼の碗で、内外面に黄釉を施し、1750年以降を示す。

B-T11出土遺物

92は肥前陶器の胎土皿で、高台は竹の節高台である。九陶Ⅱ-2期（1630～1650年代）を示す。

B-T17出土遺物

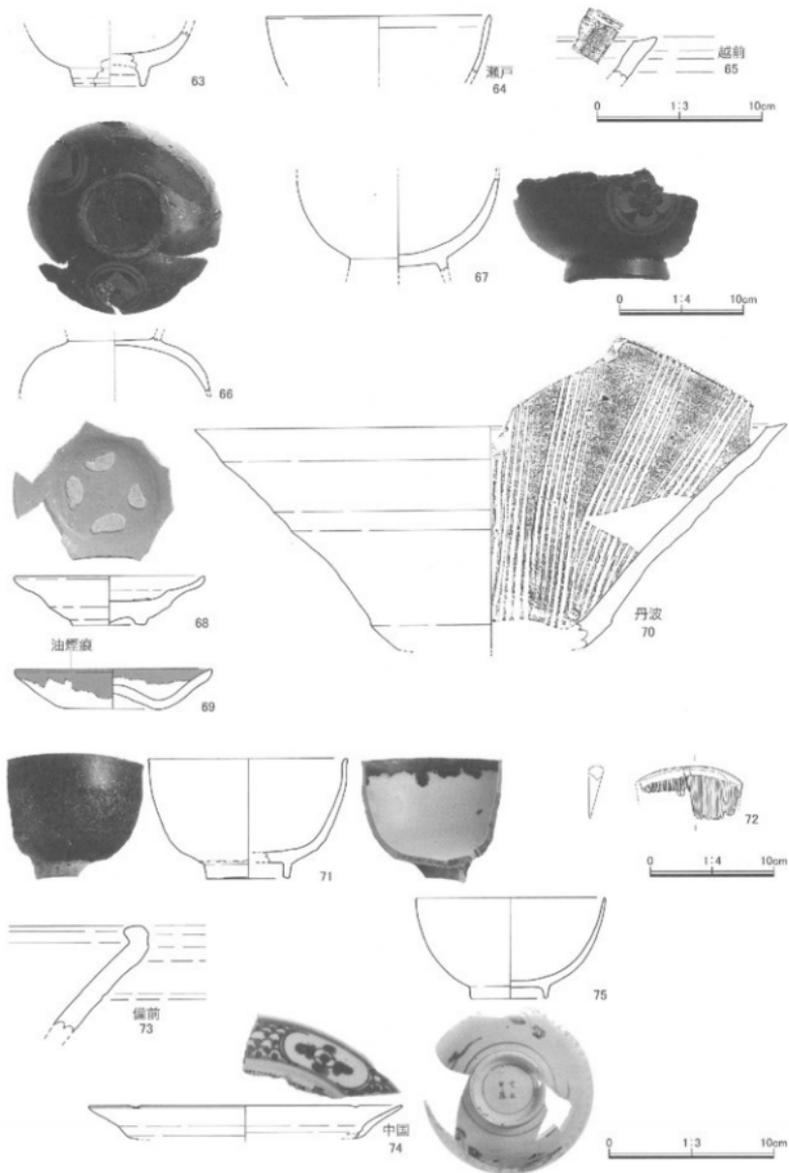
93は肥前磁器の皿で、漆接ぎの痕跡をもつ。九陶Ⅲ期（1650～1690年代）を示す。

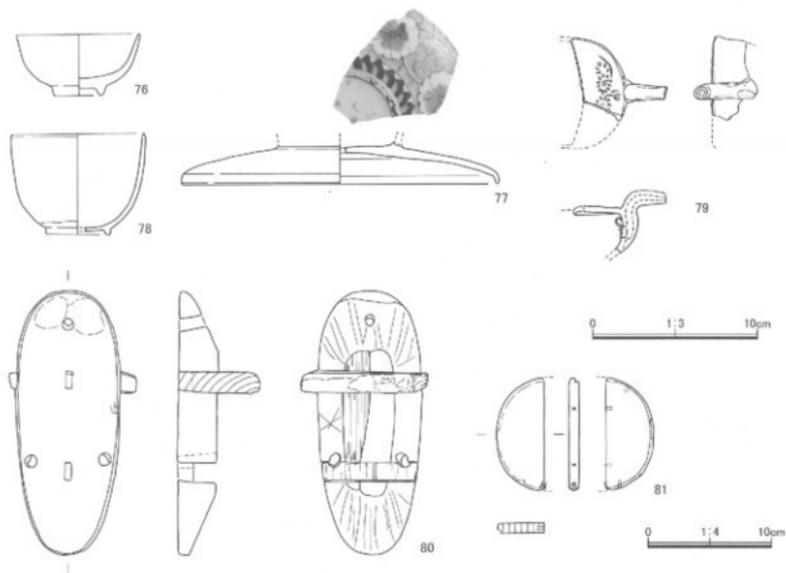
B-ピットc出土遺物

94は肥前磁器の陶胎染付の碗で、九陶Ⅳ期（1690～1780年代）を示す。95は肥前系磁器の波佐見焼くらわんか手の碗で、九陶波佐見Ⅳ～Ⅴ-1期（1690～1740年代）を示す。96は須佐唐津の播鉢である。

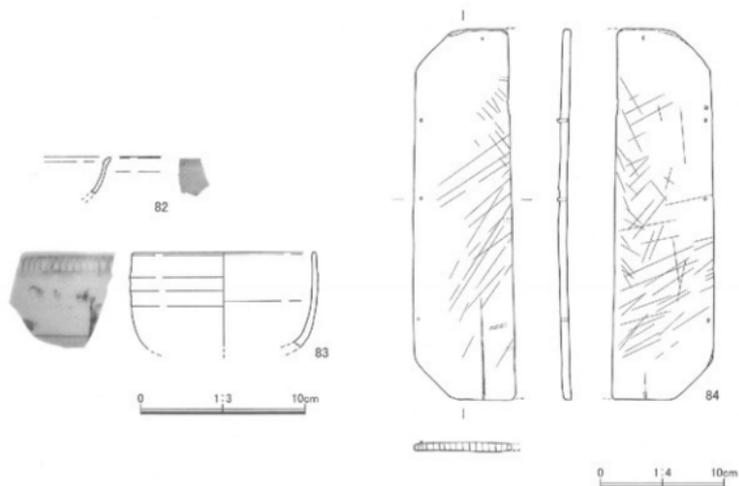
B-T21出土遺物

遺物はY層中から出土した。97は肥前系磁器の波佐見焼くらわんか手の碗で、九陶波佐見Ⅳ～Ⅴ-1期（1690～1740年代）を示す。98・99は在地系ロクロ成形の土師器皿で、底部に糸切り痕跡がある。いずれも内面に煤や油煙痕を留めており、灯明に使用されたものである。

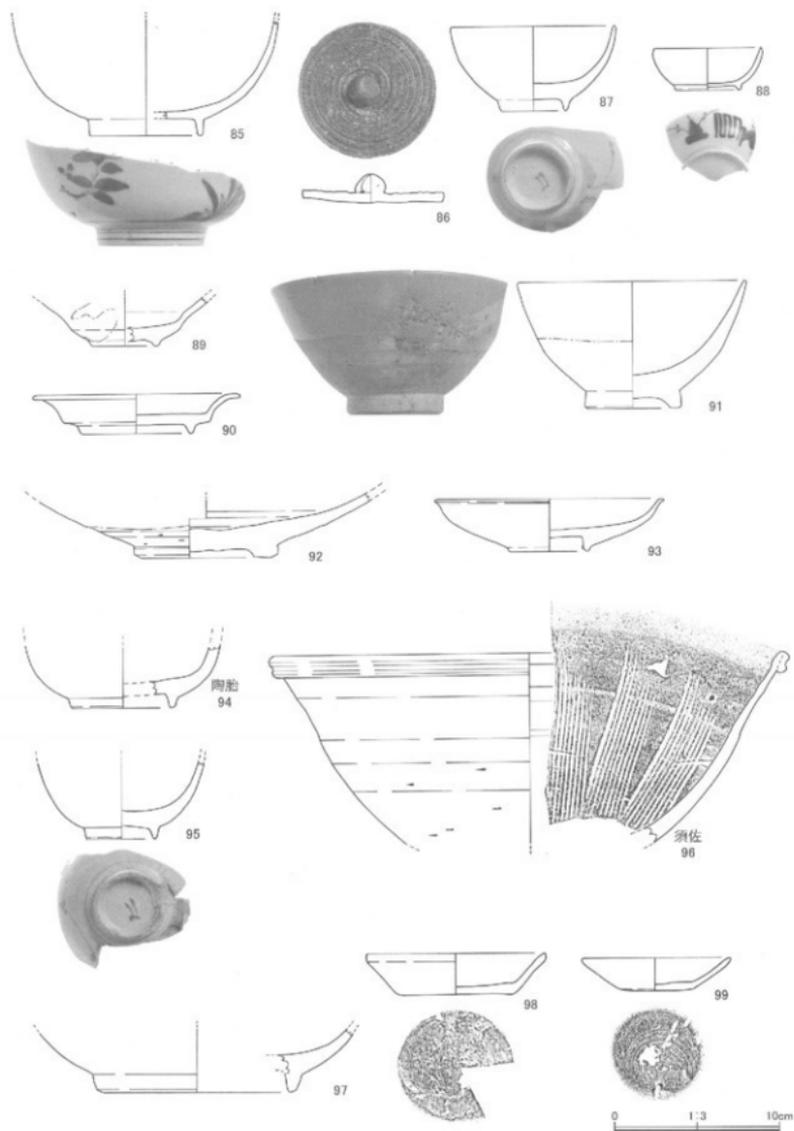




第27図 B棟第1面遺構内出土遺物



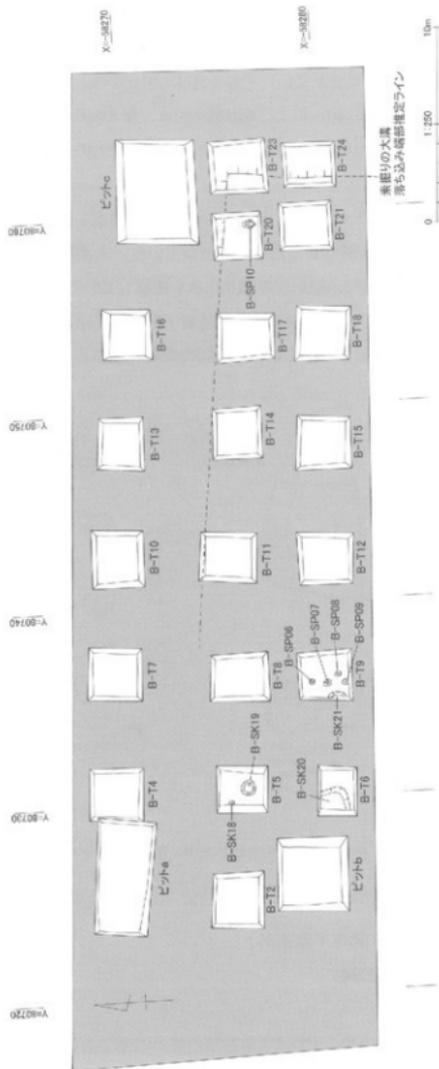
第28図 B棟第1面地中梁調査出土遺物



第29図 B棟第1面遺構外出土遺物

第3節 B棟 第2面調査成果

標高0.60m付近で城下町造成当初の盛土層(A層)を基盤とする第2遺構面を検出した。この遺構面では、土坑を4基、柱穴を5穴、素掘りの大溝の落ち込み肩部を検出している。以下に遺構の説明を詳述する。



第30図 B棟第2遺構面平面図

1. B棟 第2面検出遺構 (第30・31図)

B-SK18…T5で検出し、規模は東西幅0.15m以上、南北幅0.30m、深さ0.20mを測る楕円形土坑である。

SK19…T5で検出し、規模は直径0.70m、深さ0.22mを測る円形土坑である。

B-SK20…T6で検出し、規模は東西幅1.2m以上、南北幅1.3m以上、深さ0.60mを測る。(検出1/4程度)

埋土中から陶器片が出上したことから、この土坑の性格は廃棄土坑と捉えている。

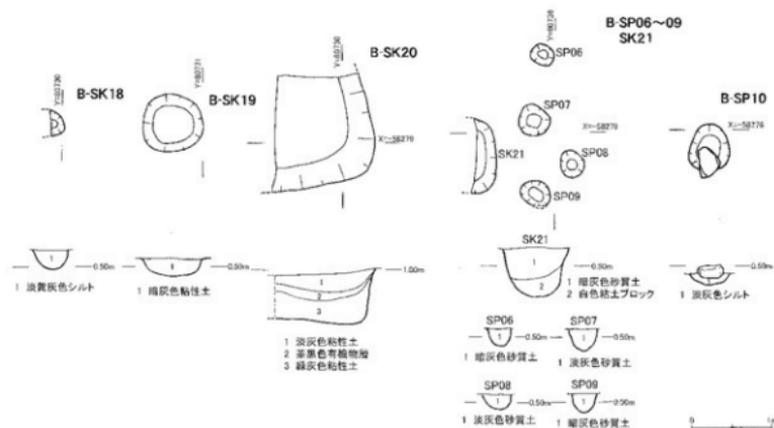
B-SP06～09…T9で検出した円形ピットで、いずれも直径0.30m前後、深さ0.20mを測る。

SK21 SK21の検出規模は東西幅0.30m以上、南北幅0.80m、深さ0.60mを測る土坑である。

B-SP10…T20で検出し、長軸0.35mの礎石を伴うピットである。礎石の石材は川原石である。

B-素掘りの大溝

T20、23、24において、素掘りの大溝の落ち込み及び分岐点を検出した。調査区に並行する東西・南北道路に沿う形状で逆L字状に大溝の落ち込みを検出している。大溝端部のみの検出に留まり、溝幅や深さなどの規模は不明であるが、A層からの掘り込みを確認している。また、T23では大溝の分岐点(合流地点か)を確認している。大手前線道路の松江城下町遺跡発掘調査で検出される堀尾期の素掘りの大溝と形状が同じ様相を示していることから、同時期の所産のものとして捉えている。



第31図 B棟第2面検出遺構平面図・断面図 (1:60)

2. B棟 第2面出土遺物 (遺構内・遺構外)

B棟 第2面遺構内出土遺物 (第32図)

B-SK20出土遺物

遺物はT6の土坑SK20から出上した。100は肥前陶器の鉢の底部である。遺物の時期は、九陶Ⅱ-2期(1630-1650年代)を示す。

B棟 第2面遺構外出土遺物（第33図）

ここでは第2遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。

B-ビット a 出土遺物

101は京都系の土師器皿である。底部に指頭圧痕をもち、口縁端部に油煙痕を留める。灯明に使用されたものである。

B-T5 出土遺物

遺物はA層上面から出土した。102は肥前磁器の碗で、九陶Ⅱ期（1610～1650年代）を示す。103は中国磁器（景德鎮）の碁笥底皿で、畳付は軸刺ぎである。104は中国磁器（景德鎮）の皿で、畳付は無軸である。

B-T9 出土遺物

105は肥前陶器の溝縁皿である。九陶Ⅱ期（1610～1650年代）を示す。

B-T12 出土遺物

106は肥前陶器の碗、107は肥前系陶器の碗で、いずれも九陶Ⅱ期（1610～1650年代）を示す。

B-T21 出土遺物

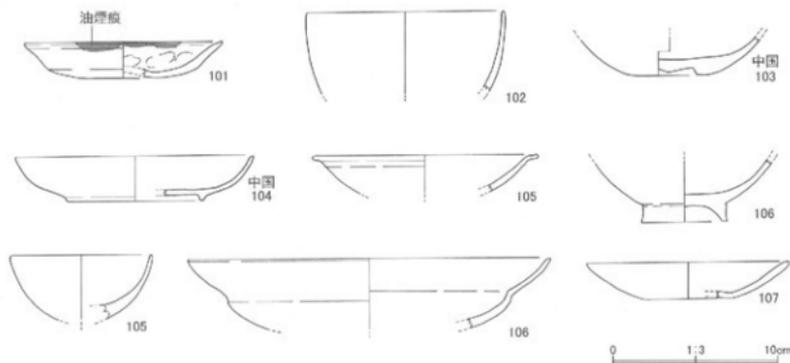
108は肥前陶器の皿で、施釉は銅緑釉かけ分けである。九陶Ⅳ期（1690～1780年代）を示す。

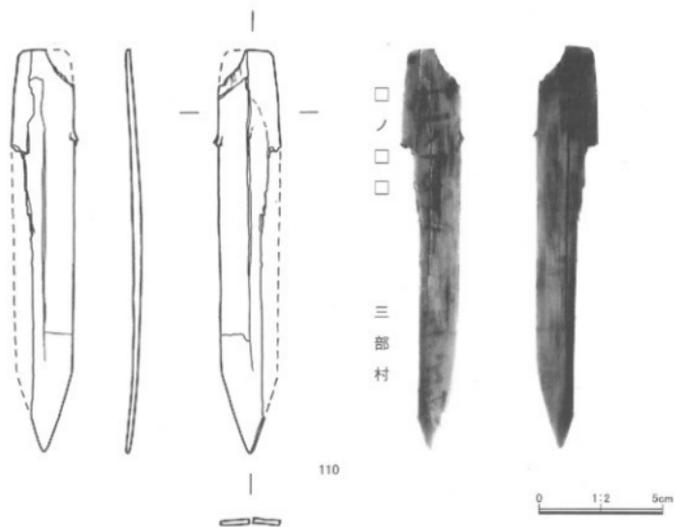
B-T24 出土遺物

109は京都系の土師器皿で、灯明に使用されたものである。110は墨書文字がみられる荷札木簡である。長さ16.5cm、最大幅2.6cm、厚さ0.3cmを測る。上方部に袂りはみられず、下方部は先端を尖らせる。墨書文字は両面にあり、片面に「□ノ□□ 三部村」と書かれている。三部村は現在の出雲市湖陵町三部にあたり、ここから荷物が届けられたものと推察される。裏面は解読不能であった。



第32図 B棟第2面遺構内出土遺物

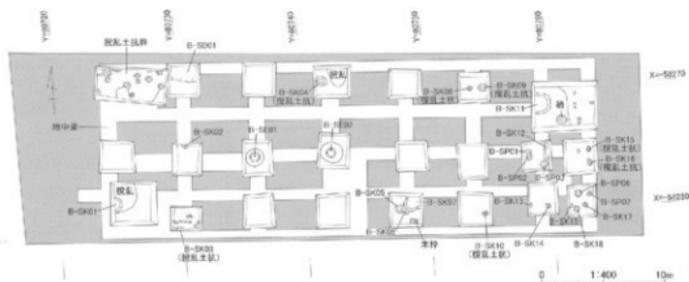




第33図 B棟第2面遺構外出土遺物

第4節 B棟調査成果のまとめ

B棟 第1遺構面



第1遺構面は、現地表面から覆乱土を除去して精査を行い、標高1.20～1.10mで検出した。

以下に第1遺構面の調査成果として、検出した主な遺構・基盤となる造成土・出土遺物・第1遺構面の年代観について示しておく。

検出した主な遺構として、調査区内中央部B-T8・T11において、井戸が2基検出したことが挙げられる。2基の井戸の間隔は6mを測る。T11で検出した井戸について、元は木枠製の井筒であったものを破損または造り替えにより改修してもなお、同じ場所に水源を求めていることを積極的に捉えると、水に関連する施設や空間がこの付近にあったものと推察される。

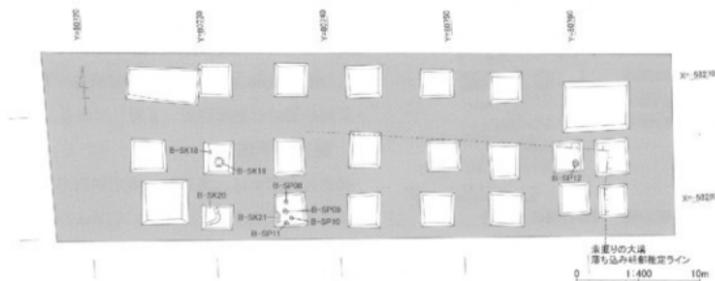
また、土坑（攪乱土坑も含む）が多く検出されている。調査区内北側と東側の縁辺部に偏って多く検出した印象である。このことは、屋敷地の縁辺部を日常的なゴミ捨て場として利用していたことを示しているのではないだろうか。

基盤となる造成土は、黄灰色砂質土や灰色シルト質土などのY層を主な基盤層としている。

遺物は、肥前陶磁器が多く出土し、波佐見焼のくわんか手も含まれる。遺物の時期は九陶Ⅲ～Ⅳ期を示すものが中心に出土した傾向にある。その他には越前・丹波・備前・須佐の播鉢や在地の布志名焼などが出土した。木製品は、下駄や漆椀、折敷、曲物などが出土している。

出土遺物の概観から、第1遺構面は17世紀末（松平前期末）から19世紀前半（松平後期）までの遺構面であると考えられる。

B棟 第2遺構面



第2遺構面は、第1遺構面から0.40mほど掘り下げて精査を行い、標高0.80～0.60mで検出した。

検出した主な遺構として、素掘りの大溝が挙げられる。調査区内全体の北側縁辺部と東側縁辺部において、逆L字状に素掘りの大溝の落ち込みを検出した。大溝は端部のみの検出に留まり、溝幅や深さなどの規模は不明であるが、A層からの掘り込みであった。大溝の埋土には灰色砂層を使用しており、北側と東側の縁辺部すべての調査区において砂層の堆積を確認している。城山北公園線改良工事予定地内の松江城下町遺跡発掘調査では、道路と並行する位置に素掘りの大溝を掘削していた痕跡が顕著に見られ、大溝の構築時期は城下町造成当初の堀尾期と考えられている。今回検出した大溝も同時期の所産のものとして捉えている。

基盤となる造成土は、灰色シルト質土と黒褐色粘質土の融和土のA層を主な基盤層としている。この土層は、場所によって多少の変化はあるものの、松江城下町遺跡において広範囲に検出される土層であり、城下町初期造成土と考えられる。A層以下の旧地表面（I層）の検出面は標高0.40～0.30mであった。

遺物は、肥前陶器が占める割合が多くなり、溝縁皿などが出土している。遺物の時期は九陶Ⅱ期のものが中心に出土した傾向にある。その他に中国産磁器（景德鎮）や荷札木簡が出土している。

出土遺物の概観から、第2遺構面は17世紀前半（堀尾期）から17世紀後半（松平前期）までの遺構面であると考えられる。

第5章 保育棟の調査成果[松江城下町遺跡(母衣町198-1)]

第1節 保育棟の基本層序と調査手法

1. 保育棟基本層序

調査区内の現地表面標高は2.00mである。保育棟の基本層序は、各調査区で行った土層観察の成果をもとに示す。(第34図)



第34図 保育棟基本土層図

B棟調査区内の基本層序では、計8層が確認された。上層から、第1層は砂利・碎石による現代の整地層、第2層は近現代遺物を含む混乱層、第3層は焼土層、第4層は整地層である山土造成土(Y層)、第5層は淡灰色シルト質土～粘土の整地層、第6層は城下町初期段階の造成土と考えられる灰色シルトと黒褐色粘質土の融和土(A層)、第7層は黒褐色粘質土の旧地表面(I層)、第8層は灰色～青灰色シルト質細砂層の自然堆積層(II層)である。

2. 調査の手法

調査区の設定は、基礎杭工事の杭打ちにより、遺構面に影響のある部分に1.8m×1.8mの調査区を15箇所(H-T1～H-T15)設定して調査を行った。地中梁工事部分については、当初は遺構面に影響のない部分と想定されていたが、想定よりも浅い位置で遺構面が検出されたことから、松江市文化財課が主体となり立会本調査を実施している。調査面積は、保育棟建物予定地内649㎡のうち、地下に影響を及ぼす基礎杭工事部分73.5㎡を対象としている。

基礎杭部分は、平成24年7月30日から調査を開始し、同8月7日に調査を終了した。地中梁部分は、9月18日から調査を開始し、9月21日に調査を終了した。

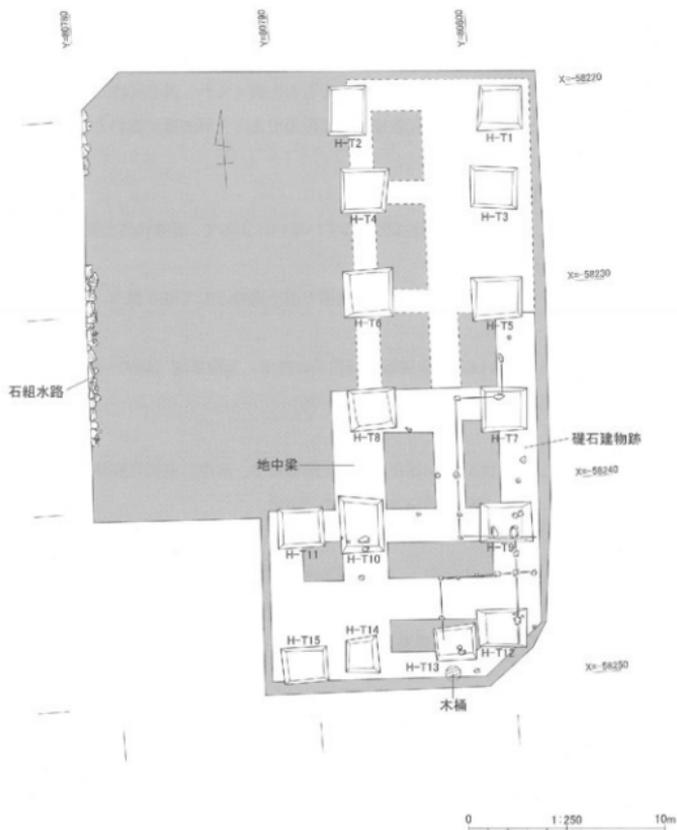
各遺構面の調査成果は次節に委ね、屋敷地の特定は第6章-第2節-2で詳述する。



第35図 保育棟調査区・地中梁配置図

第2節 保育棟 第1面調査成果

標高1.30～1.20mでシルト質の山上造成土（Y層）を基盤とする第1遺構面を検出した。この遺構面では礎石建物跡を検出している。礎石は主に扁平な大海崎石や川原石を使用し、礎石の下に根石（梁石）をもつものも含まれていた。土坑やピットは検出していない。以下に遺構の説明を詳述する。



第36図 保育棟第1遺構面平面図

1. 保育棟 第1面検出遺構（第36図）

標高1.30～1.20mでシルト質の山土造成上（Y層）を基盤とする第1遺構面を検出した。この遺構面では調査区内において、礎石建物跡を検出した。礎石は総計32個検出しており、礎石の下に根石（栗石）をもつものも含まれていた。礎石建物跡の規模は、東西2間半（約5m）以上×南北9間（約17.5m）以上を測る。礎石の間隔は、半間（0.97m）～1間（1.95m）を測り、礎石列の基軸方位はN-4°-Eを示していた。礎石の石材は上面が扁平な大海崎石（角閃石粗面安山岩）や川原石を主に使用している。

また、第1遺構面基盤層の上層では炭と焼土層の堆積を確認しており、火災の痕跡と考えられる。焼土は粒子の揃った砂状で塊になっているが、指で押さえると粉々に砕けてしまう。壁上ではなく、天井裏にのせられた土と思われる。これらの成果を踏まえて礎石列の検出位置から考察すると、調査区内中央から南側へかけて屋敷の主体部が展開していたものと捉えられ、調査区内北半での土坑や礎石などの遺構検出はなかったため、北側は屋敷地内の空閑地であった可能性が高いものと推察する。

2. 保育棟 第1面出土遺物（遺構外）

保育棟第1面において、遺構内から遺物は出土していない。よって、遺構外出土遺物のみ掲載する。

保育棟第1面遺構外出土遺物（第37図）

ここでは第1遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。

H-T1 出土遺物

遺物はY層中から出土した。111は肥前磁器の芙蓉子の皿で、九陶Ⅲ期（1650～1670年代）を示す。

112は在地系の土師器皿で灯明に使用された痕跡をもつ。

H-T2 出土遺物

遺物はY層中から出土した。113・114は在地系の土師器皿で、底部に糸切り痕跡をもつ。いずれも口縁部に油煙痕を留めており、灯明に使用されたものである。

H-T7 出土遺物

T7で出土した遺物は古手のものが多い。115は肥前磁器の碗、116は肥前陶器の播鉢である。いずれも九陶Ⅱ期（1610～1650年代）を示す。117は中国磁器の碗、118は高台内に「大明年製」の銘をもつ中国磁器（景徳鎮）の皿、119は中国磁器（景徳鎮）の皿である。

H-T8 出土遺物

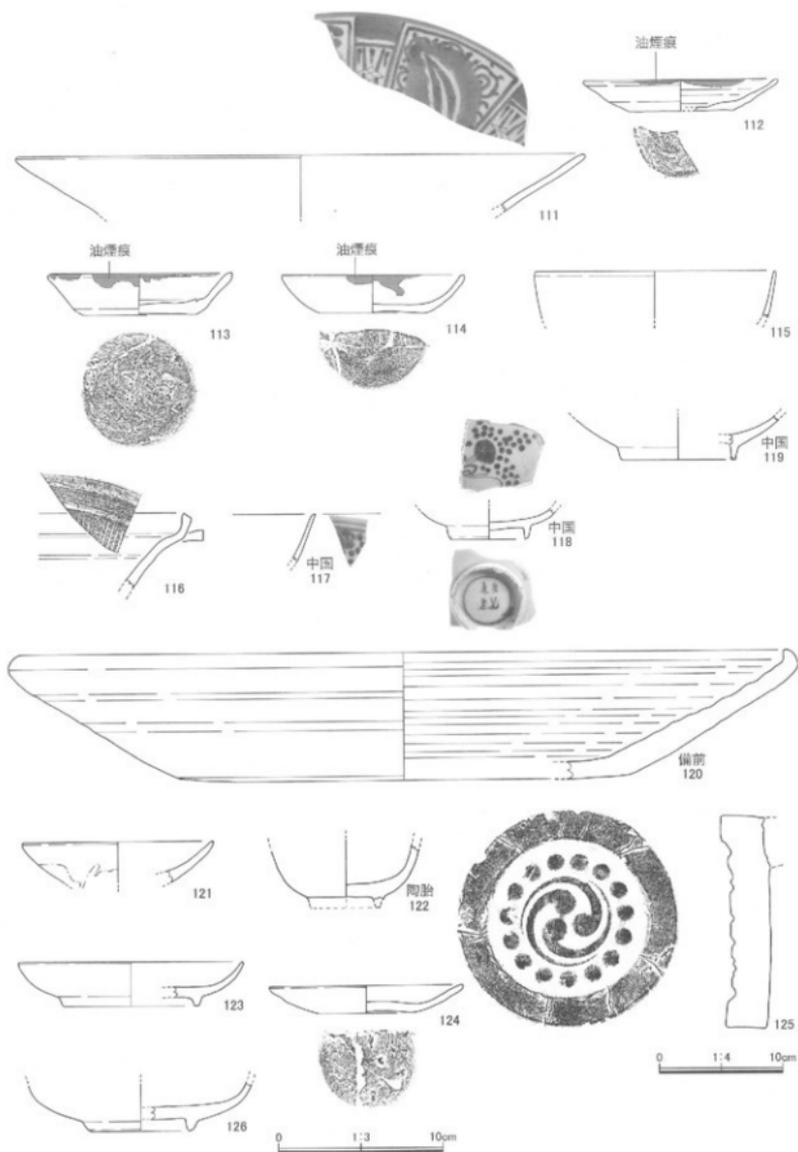
120は口径80cmを測る、大振りな備前焼の陶器の浅鉢である。

H-T9 出土遺物

遺物は礎石面から出土した。121は肥前陶器の皿で、九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780年代）を示す。122は肥前磁器の陶胎染付の碗で、九陶Ⅳ期（1690～1780年代）を示す。

H-地中梁調査出土遺物

123は肥前磁器の波佐見焼くらわんか手の皿で、九陶波佐見Ⅳ～Ⅴ-1期（1690～1740年代）を示す。124は在地系ロクロ成形の土師器皿で、底部に糸切り痕跡がある。125は軒丸瓦である。三巴文の外側に珠文が15個配され、巴文の頭部は右向き、尾部が左向きである。126は肥前磁器の皿で、九陶Ⅱ-2期を示す。



第37図 保存棟第1面遺構外出土遺物

第3節 保育棟 第2面調査成果

標高1.00～0.80mで淡灰色シルト質土～粘土層を基盤とする第2遺構面を検出した。この遺構面では、土坑や柱穴を15基検出している。ピットには柱や礎盤石が遺存しているものも含まれていた。検出した柱穴は調査区内一部の検出に留まっている。以下に遺構の説明を詳述する。



第38図 保育棟第2遺構面平面図

1. 保育棟 第2面検出遺構 (第38・39図)

H-SK01,02…T1から検出したSK01は東西幅0.65m、南北幅0.40m以上、深さ0.25mを測る土坑である。

SK02は東西幅0.47m、南北幅0.35m、深さ0.28mを測る円形土坑である。

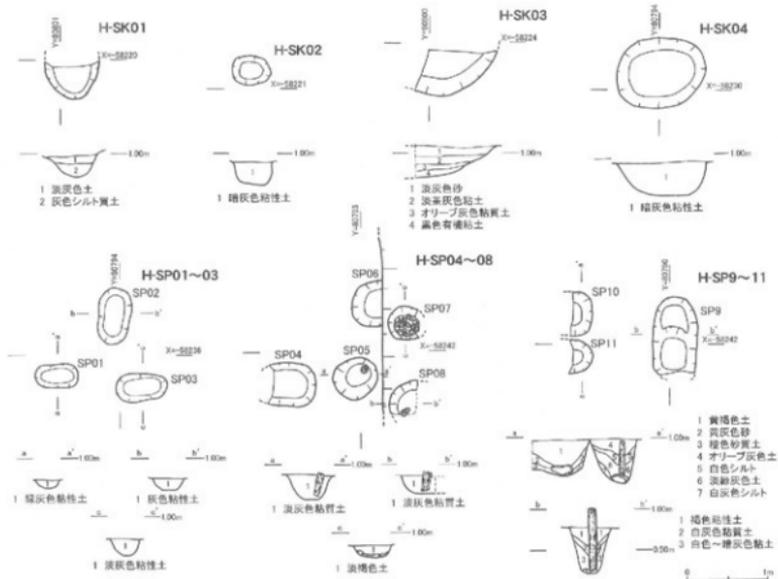
H-SK03…T3から検出し、規模は東西幅0.80m以上、南北幅0.50m以上、深さ0.40mを測る。検出は土坑全体の約1/4程度と考えられる。土坑から遺物は出土しなかった。

H-SK04…T6から検出し、規模は東西幅1.10m、南北幅0.84m、深さ0.40mを測る。楕円形土坑である。

H-SP01～03…T8から検出したSP01は東西幅0.52m、南北幅0.28m、深さ0.10mを測る。SP02は東西幅0.37m、南北幅0.70m、深さ0.15mを測る。SP03は東西幅0.60m、南北幅0.30m、深さ0.18mを測る。いずれも楕円形を呈するピットである。SP03では柱の抜き取り痕跡を確認した。

H-SP04～08…T10から検出したSP04は東西幅0.55m、南北幅0.52m、深さ0.20mを測るピットである。SP05は東西幅0.55m、南北幅0.50m、深さ0.30mを測り、ピット中に太さ8cmの柱が残る。SP06は東西幅0.35m以上、南北幅0.50m、深さ0.18mを測るピットで、一部上層からの落ち込みと切り合う。SP07は東西幅0.40m、南北幅0.38m、深さ0.15mを測り、ピット中に根固め石が残る。SP08は東西幅0.35m以上、南北幅0.35m以上、深さ0.20mを測り、ピット中に太さ10cmの先端が平坦な柱が残る。

H-SP09～11…T11から検出したSP09は東西幅0.55m、南北幅0.90m、深さ0.56mを測り、ピット中に柱の残る柱穴である。SP10、11は1/2程度の検出であったが、柱と礎盤石をもつ柱穴である。



第39図 保育棟第2面検出遺構平面図・断面図 (1:60)

2. 保育棟 第2面出土遺物（遺構外）

保育棟第2面において、遺構内から遺物は出土していない。よって、遺構外出土遺物のみ掲載する。

保育棟第2面遺構外出土遺物（第40図）

ここでは第2遺構面直上から出土した遺物を、遺構外出土遺物として取り扱う。

H-T1 出土遺物

ゴミ層中から出土した127・128は、肥前陶器の胎土目皿で、九陶Ⅰ-2期（1594～1610年代）を示す。128は高台内に「十」と墨書される。

H-T2 出土遺物

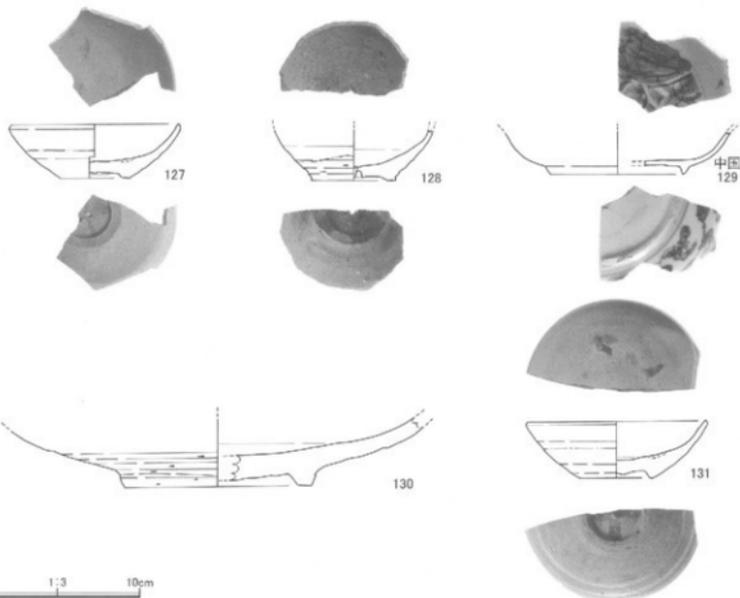
遺物は深掘り部分のA層中から出土した。129は中国磁器（景德鎮）の皿である。

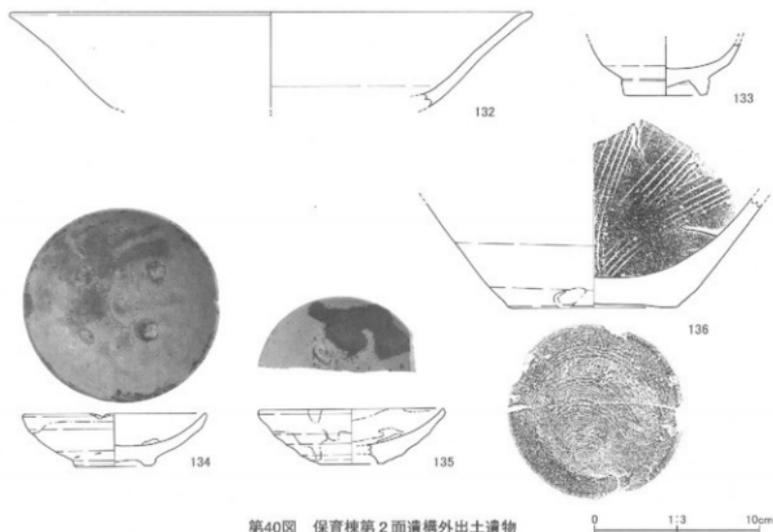
H-T3 出土遺物

130は上野・高取系の陶器の大皿で、17世紀前半を示す。131は肥前陶器の胎土目皿で、高台は碁笥底で高台内に「十」と墨書される。132は肥前陶器の大皿で、銅緑釉が施軸される。133は肥前陶器の碗である。134は肥前陶器の胎土目皿で、灯明に転用された痕跡をもつ。135は肥前陶器の胎土目皿である。131～135のいずれも九陶Ⅰ-2～Ⅱ期（1594～1650年代）を示す。

H-T8 出土遺物

遺物は第2面のやや深い位置で検出した。136は肥前陶器の搗鉢で、搗り日はやや磨滅しており、底部に糸切り痕跡をもつ。





第40図 保育棟第2面遺構外出土遺物

第4節 保育棟調査成果のまとめ

保育棟 第1遺構面



第1遺構面は、現地表面から掘乱土を除去して精査を行い、標高1.30～1.20mで検出した。

以下に第1遺構面の調査成果として、検出した主な遺構・基盤となる造成土・出土遺物・第1遺構面の年代視について示しておく。

検出した主な遺構として、礎石建物跡が挙げられる。礎石建物跡の規模は、東西2間半(約5m)以上×南北9間(約17.5m)以上を測る。調査区内中央から南側へかけて屋敷の主体部が展開していたものと捉えられる。調査区内北半での土坑や礎石などの遺構検出はなかったため、北側は屋敷地内の空閑地であった可能性が高いものと推察する。

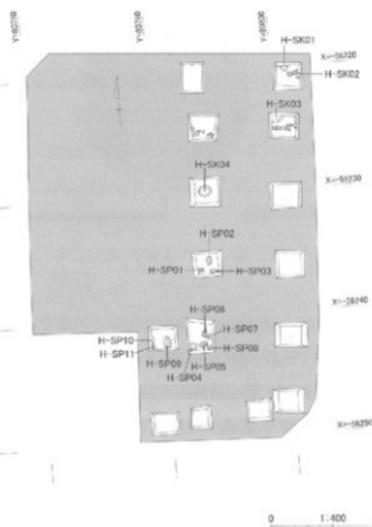
基盤となる造成土は、黄灰色砂質土や灰色シルト質土などのY層を主な基盤層としている。また、Y層上層では焼土の堆積が確認されたことから火災の痕跡をうかがわせている。

遺物は、肥前陶磁器が多く出土した。遺物の時期は九陶Ⅲ～Ⅳ期を示すものが中心に出土した傾向にある。その他に備前の浅鉢や在地系のロクロ成形の土師器皿などが出土した。

また、H-T7から中国産磁器を検出しているが、このトレンチだけ突出して古い時期を示しているのではなく、伝世品の可能性や遺構外からの出土であるため、攪乱などにより下層と混同して出土した可能性が考えられる。

出土遺物の概観から、第1遺構面は17世紀末（松平前期末）から19世紀前半（松平後期）までの遺構面であると考えられる。

保育棟 第2遺構面



第2遺構面は、第1遺構面から0.30mほど掘り下げて精査を行い、標高1.00～0.80mで検出した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物跡のピット群である。検出した柱穴は調査区内一部の検出に留まり、建物跡の規模の復元までには至らなかったが、屋敷地の表口周辺部分に掘立柱建物の存在をうかがわせる。ピットには柱や礎盤石が遺存しているものも含まれていた。

基盤となる造成土は、灰色粘性土（シルト質含む）を基盤層としている。A棟・B棟で検出した第2面基盤層の検出標高と当地の第2面検出標高を比較すると、標高が約20cm程度高い位置で遺構面を検出していることになる。層位の確認のため、一部サブトレンチを設定し、深掘りを行ったところ、標高0.60m付近でA層を確認した。

この結果から、A棟・B棟・保育棟の3地点において、平均して標高0.60mにA層が堆積していることが明らかとなった。A層以下のII地表面（I層）の検出面は標高0.30～0.25mであった。

遺物は、肥前陶器の占める割合が多く、大半が胎土目のものであった。遺物の時期は九陶Ⅰ～Ⅱ期のものが中心に出土した傾向にある。その他に中国産磁器（景徳鎮）や銅緑釉の肥前陶器の大皿、上野・高取系陶器の大皿など、古手の遺物が多く出土している。

出土遺物から考察する年代観は、概ね17世紀前半（堀尾期）から17世紀中頃（松平前期）を示すものと考えられる。ただし、遺構の検出標高や基盤層を含めて考察した場合、第2面の年代評価は異なってくる。

第2面は、A層検出高0.60mよりも高い位置の標高1.00～0.80mで遺構を検出したことやA層より1層上層で検出していることを積極的に捉えた場合、A層は1607年以降の堀尾期造成面とし、今回検出した第2面基盤層は、1634年以降の京極期もしくは1638年以降の松平期前期の造成面と評価したい。

第6章 総 括

第1節 母衣町周辺における現況地盤と旧地表面（I層）の検出標高の比較

ここでは、松江市殿町～母衣町に特化して旧表土（I層）についての検出標高の比較検討を行い、旧地表面からわかる城下町造成以前の周辺環境の復元を示したい。特に今回の調査成果により、母衣町南北軸での旧地表面の検出が可能となり、現段階までの城下町遺跡発掘調査によって確認された旧地表面の検出標高を併せて提示しておく。また、検出標高が示す殿町～母衣町地内の旧地表面の推移は、各調査地点の成果を基に東西軸・南北軸と個別に



第41図 松江圏都市計画図での比較地点（殿町～母衣町）

設定して検討した。第41図は、現在までに発掘調査が行われた地点を示す。地点①の家老屋敷跡では遺跡が良好な状態で遺存し大規模な発掘調査を行うことができ、遺構・遺物とともに松江城下町遺跡発掘調査において指針となる調査成果が得られている。最新の調査成果から、地点⑩において、水田畦畔の遺構が検出され、I層を水田耕作土として使用していたという新たな知見が報告されている。

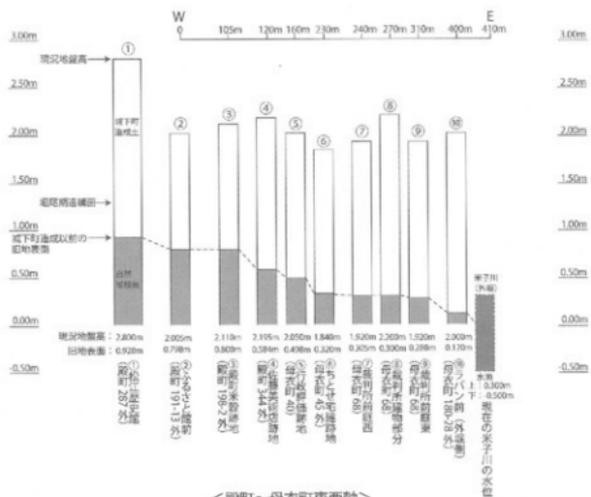
東西軸について（地点①～地点⑩）

表5のグラフで示すとおり、地点①での旧地表面は標高0.92～0.88mの高さでI層の堆積を確認している。城山北公園線改良工事予定地内の松江城にいちばん近い地点②では標高0.79mでI層を確認しており、東西軸ほぼ中心部の地点⑤では標高0.49m、西端にあたる地点⑩では標高0.12mでI層を確認した。これらの結果から、城下町造成以前の旧地表面は松江城に近い西側地点が高く、東方へ向かうに従って徐々に低くなっていることが認められる。また、城下町造成以前は低湿地であったと考えられているが、殿町・母衣町では標高がやや高い位置から旧地表面が検出されているため、旧地表は水面よりも上面に露出し、乾燥していた土壌であった可能性が高い。そのため、I層（有機質土）のうち分解が進んでいる土壌が黒褐色を呈する旧地表面として遺存しているものと推察される。今後、旧地表面土壌の分解・未分解が分岐となる地点の検出により、城下町造成以前の水面や当時の人々の活動範囲などが解明できるものとする。

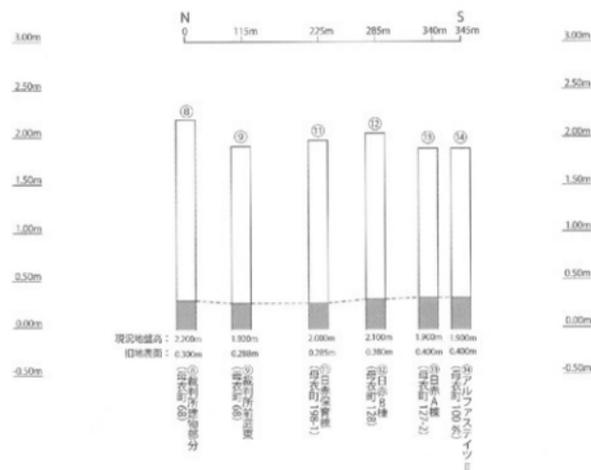
南北軸について（地点⑧～地点⑩）

南北軸北端の地点⑧での旧地表面は標高0.30mの高さでI層の堆積を確認している。城山北公園線

改良工事予定地内の大手前線道路に面した地点⑨では標高0.28mでI層を確認。今回調査を行った保育棟建設予定地内の地点⑪では標高0.28m、B棟建設予定地内の地点⑫では標高0.38m、A棟建設予定地内の南北軸南端地点⑬では標高0.40mでI層を確認している。これらの結果から、母衣町の南北軸では、狭義ではあるが高低差がほとんどないほぼ平坦な旧地面であったと捉えられる。



<殿町～母衣町東西軸>



<母衣町南北軸>

表5 現況地盤と旧地面（I層）の検出高の比較（縦軸1：50）

第2節 発掘調査の成果と今後の課題

前節において、母衣町周辺における旧地表面の検出標高の比較を取り上げた。ここでは、本遺跡の発掘調査成果を踏まえて、調査地ごとに屋敷跡の時期（堀尾期・京極期・松平期）の変遷を示したい。ただし調査の結果から、A棟調査区北半とB棟調査区は同一の屋敷地内と考えられるため、まとめて考察を行うこととする。さらに、今回の調査のもっとも大きな成果として、A棟調査時において検出した屋敷境が挙げられる。この屋敷境を上軸として、調査成果および絵図面や文献史料を含めて検討し、調査地に該当する松平期の屋敷地の景観復元を試みたい。

今回の調査地点は、A棟・B棟・保育棟の3地点が該当し、3棟合計で51箇所の調査区を設定して調査を実施した。また、調査箇所は建物予定地内のうち、地下の遺跡に影響が及ぶ部分（建物基礎杭部分・地下ビット部分・地中梁部分）であり全面発掘は行っていないため、可能なかぎりの遺構検出・遺物の採取に努めたが、遺構の全容や連続性の確認が十分にできなかった点があることをご了解いただきたい。

1. 屋敷地の拝領者の変遷

屋敷地の拝領者名や標高は、絵図や「出雲・隠岐堀尾山城守家中給知帳」「京極高次分限帳」「列上録」などの文献史料から判明している（第2章・第3節）。ここでは、堀尾期・京極期・松平期における代表的な松江城下町絵図をもとに、屋敷地の変遷を示しておく。

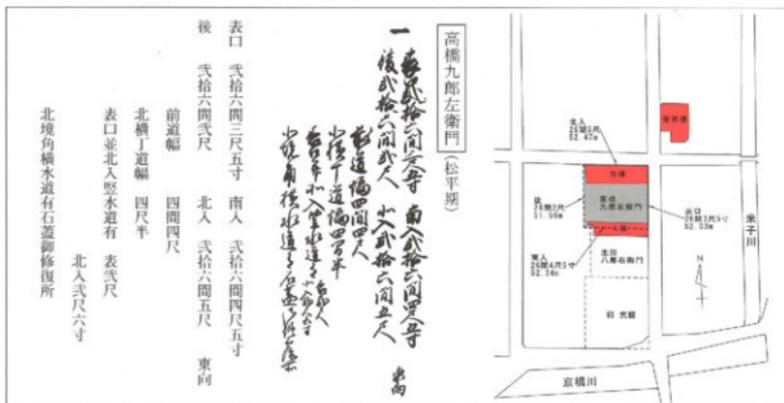
堀尾氏が藩主の時代に、最初に屋敷を拝領したのはA棟北半及びB棟に比定される森家（禄高600石）、A棟南半に比定される塩津家（禄高200石）、保育棟に比定される百々家（禄高600石）で『堀尾期松江城下町絵図』（元和6～寛永10年〈1620～33年〉）に名がみえる。この後、寛永11年（1634年）に京極氏が藩主となり、A棟北半及びB棟に比定される斎藤家（禄高1300石）、A棟南半に比定される村上家（禄高400石）、保育棟に比定される大塚家（禄高580石）の屋敷地となる。寛永15年（1638年）に松平氏が藩主となり、松平氏の家臣の屋敷地へと交代する。『松平期松江城下町絵図』（万延元～文久元年〈1860～61年〉）によると、A棟北半及びB棟に比定される高橋家（禄高500石）、A棟南半に比定される池田家（禄高120石）、保育棟に比定される太田家（禄高300石）の名がみられ、「武家屋敷明細帳」からもその名を照合できる。

松平期は233年間の長い統治期間であり、その間に何度か屋敷替えに伴う居住者の交代が行われている。このため、松平期における屋敷の拝領者は数名存在していることが文献史料から読み取れるが、数年～数十年単位での居住者の特定は火災の痕跡や墨書木簡などの文字史料の出上がない限り、考古学的な知見からは難しいのが現状である。

2. 屋敷境から復元する松平期の屋敷地（第42図）

A棟調査区中央部で東西に延びる屋敷境を検出したことにより、江戸時代後期の屋敷の特定が可能となった。この屋敷境は第1遺構面で検出され、遺構の年代は遺物の概観から18世紀～19世紀前半を示す。

屋敷境の基軸方位はE-3.7°-Sで、この軸は市道母衣町大橋川線の南北道路軸に直交している。これまでの松江城下町遺跡発掘調査で検出された建物跡や屋敷割の溝、道路などの基軸とはほぼ同様の傾きをもつ。屋敷境は1条の溝で、両側に2段の石垣が積み込まれる。また、境界であるともに排水機能の性格をもち、調査地西側から東側への傾斜を持たせており、東側道路に面する石組水路への排水を行っていたものと考えられる。松平期絵図から、屋敷が南北に隣接する高橋家と池田家の屋敷境と判明し、さらにそれ



第42図 武家屋敷明細帳にみる高橋九郎左衛門の屋敷地と屋敷の推定範囲 (松平期後期)

を裏付ける史料に松平期の屋敷拝領者の変遷が書かれた武家屋敷明細帳がある。この史料と今回の発掘調査成果を整合すると、高橋家の屋敷地の規模(表口)が現地での測量成果とほぼ一致する結果となった。

第42図のとおり、高橋家の屋敷の向きは東向きで、表口は26間3尺5寸(52.03m)、南入は26間4尺5寸(52.34m)、後は26間2尺(51.56m)、北入は26間5尺(52.47m)と記される。現地測量では、A棟調査区で検出した屋敷境石垣の高橋家側(北側石垣天端)を基点として、B棟調査区北側の石組水路までの直線距離の測量を行った。結果、直線距離は51.50mを測り、史料に記載されている表口の規模(52.03m)とほぼ一致することとなった。これらの成果から、A棟調査区北半～B棟調査区は高橋家の敷地であることが事実となった。(1間=196cm 1尺=30.3cm 1寸=3.3cmとして換算)

さて、ここでひとつ問題なのが、屋敷境石垣(溝)の所有権及び管理はどうしていたのかという点である。今回の調査成果では石垣の石材は屋敷地によって違うことや、それに伴う造成土の使用も屋敷地ごとに違うという結果であったため、明確に屋敷地の線引きはなされていたものとする。近隣の家老屋敷跡(殿町287外)の調査事例から掘尾・京極期の屋敷境は、一方の屋敷が所有していたとの報告があり、溝の管理は屋敷ごとに行っていたという見解に至っている。しかし、今回検出した屋敷境石垣(溝)は排水機能をもつ溝であるという観点から考察すると共有物であったと捉えられる。屋敷間での些細なやりとりまで及ぶ可能性も考えられるが、松平期では公共のものであるという意識の方が高かったのではないかと推察する。

3. 遺構からみた屋敷内の土地利用

(1) A棟 [松江城下町遺跡：母衣町127-2]、B棟 [松江城下町遺跡：母衣町128]

A棟調査で検出された第1面の遺構は8基、出土した遺物は124点(破片数含む)、総重量は約10kgである。第2面の遺構は11基、出土した遺物は41点(破片数含む)、総重量は約3.5kgである。B棟調査で検出された第1面の遺構は約40基、出土した遺物は96点(破片数含む)、総重量は約7.7kgである。第2面の遺構は10基、出土した遺物は28点(破片数含む)、総重量は約1kgである。遺構の種類は、土坑・溝・ピット・屋敷境(溝・石垣)・井戸・ゴミ穴・掘立柱建物の柱穴・素掘りの大溝で、土坑の

切り合いは最大2回で、分布が集中する場所と何も無い空間がある。

A棟調査区は、前述した屋敷境を境界として南北に隣接する2つの屋敷地の縁辺部分を調査し、B棟調査区は、屋敷地の北側縁辺部分を調査したこととなる。また、調査結果からA棟調査区北半とB棟調査区は同一の屋敷地内であることが判明している。屋敷の主体（建物部分）はA棟とB棟の中間部分にあたるものと考えられ、調査地が縁辺部であったためか明瞭な建物跡は検出されなかった。

A棟第1面で検出した屋敷境は、17世紀前半の堀尾期では幅1.7m・深さ0.6mを測る素掘り溝であったが、松平期になると石垣を構築し、溝幅も0.8mと狭くなっている。屋敷境溝が素掘りの溝から石垣へと移り変わってゆく画期となる事象は、嵩上げ造成と考えられる。嵩上げ造成の契機は、ひとつに藩主の交代による家臣団の屋敷替えに伴う造成、もうひとつは洪水などの災害に対処するために石垣を敷設するなどして地盤をより強固にする必要があったためと推察する。

土坑やゴミ穴は数十基検出しており、特にB棟第1面での検出が多い。屋敷の主体はA棟とB棟の中間部分であるため、主体部ではない縁辺部は日常的なゴミ捨て場として利用していた空間ではないかと考える。また、A棟・B棟第1面において瓦などを含む大形の土坑を検出しているが、これらは屋敷の何らかの画期に際してゴミなどを投棄して埋められた土坑と考えられ、その契機は屋敷替えによる家屋の解体ではないかと捉えている。19世紀代の陶磁器の破棄が多く目立つことなどから、明治維新に伴う屋敷引き払い時に生活用品を捨てていったものと理解される。

A棟第2面では、掘立柱建物跡SB01や大形の廃棄土坑が検出された。掘立柱建物跡SB01については、土層断面で確認した素掘り溝と重複する位置で検出しているが、素掘り溝を埋め戻した後に掘立柱建物を構築したものと考えられるため、多少の時期差が生じているものと思われる。

B棟第2面では、東西・南北の道路に沿う形状で、逆L字状に素掘りの大溝の落ち込みを確認している。溝端部のみ検出に留まり、溝幅や深さなどの規模は不明であるが、A層からの掘り込みであった。また、B-T23において大溝の結合部分は確認できなかったが、大溝の分岐点端部（合流地点）を確認している。城山北公園線改良工事予定地内の大手前線道路発掘調査成果では、道路と並行する位置に素掘りの大溝の検出が顕著に見られ、大溝の構築時期は城下町造成当初の堀尾期と考えられている。今回検出した大溝も同時期の所産と思われる、大手前線道路以外の地点でも、屋敷割や区画整備のための大溝掘削を城下町造成初期段階に行っていたことがうかがえる。

(2) 保育棟〔松江城下町遺跡：母衣町198-1〕

保育棟調査で検出された第1面の遺構は礎石建物跡のみで土坑やピットは検出していない。出土した遺物は36点（破片数含む）、総重量は約3.2kgである。第2面の遺構は15基、出土した遺物は39点（破片数含む）、総重量は約3kgである。遺構の種類は、礎石・土坑・ゴミ穴・掘立柱建物の柱穴であった。

保育棟調査区は、堀尾・京極期絵図に比定される屋敷地の表口付近を調査し、松平期絵図に比定される屋敷地の中央部付近～南側部分を調査したこととなる。

第1面では、調査区内北側での遺構検出はなかったが、中央部付近から南側において、礎石列を確認している。礎石は半間～1間の間隔で並んでおり、礎石建物の検出規模は東西5m以上・南北17.5m以上を測る。調査成果から、屋敷の中央部付近より北側は空閑地で中央部より南寄りに屋敷があったものと考えられる。

第2面では、土坑や掘立柱建物の柱穴を検出した。建物の復元までには至らなかったが、保育棟の調査成果として、大規模な発掘調査を行った家老屋敷跡（松江城下町遺跡：殿町287外）の建物の変遷と同様に、掘立柱建物から礎石建物へと移り変わっていく建物の変遷を示すものとして捉えている。

4. 遺物が示す遺構面の年代観

A 棟—第1遺構面(標高1.20~1.00m・基盤層:Y層) ……………	17世紀末~19世紀中頃
第2遺構面(標高0.75~0.60m・基盤層:灰色砂層、A層) ……………	17世紀前半~17世紀中頃
B 棟—第1遺構面(標高1.20~1.10m・基盤層:Y層) ……………	17世紀末~19世紀前半
第2遺構面(標高0.80~0.60m・基盤層:A層) ……………	17世紀前半~17世紀後半
保育棟—第1遺構面(標高1.30~1.20m・基盤層:Y層) ……………	17世紀末~19世紀前半
第2遺構面(標高1.00~0.80m・基盤層:灰色粘性~シルト質土) ……	17世紀前半~17世紀後半

5. 遺物の組成 (A棟・B棟・保育棟)

A 棟(総破片数311点) ……磁器33.4% 陶器49.5% 土師器4.8% 焼塩壺0.6% 土製品2% 瓦2%
金属製品0.6% 木製品3.6% 骨角類0.6% ガラス類2.6% その他0.3%
B 棟(総破片数286点) ……磁器35% 陶器43% 土師器7% 焼塩壺0% 土製品1% 瓦1%
金属製品0.3% 木製品9.4% 骨角類0% ガラス類2% その他1.3%
保育棟(総破片数130点) ……磁器36.2% 陶器35.4% 土師器15.4% 焼塩壺0% 土製品2.3% 瓦3%
金属製品0% 木製品5.4% 骨角類0% ガラス類0% その他2.3%

6. 今後の課題と展望

近世松江城下町遺跡の本格的な調査は平成18年に始まり、現在までに7年間の蓄積があるが、まだ未解明な部分が多い。屋敷の構造については地域特有の建物構造や敷地利用があると思われる。発掘調査で得られる情報は、近世都市の諸施設の変遷を明らかにし、当時の生活ぶりを如実に示してくれる重要な要素なのである。今後は、どのようにして城下町の整備を行っていたのか、そして都市として発展させていくためにどのような過程をたどっていたのか、城下町発掘調査から明らかとなっていくことを望みたい。

今回の調査は中心市街地にも関わらず、827㎡の調査面積が協力頂けた。調査に御協力して頂いた事業者及び工事関係者の皆様に記して深謝の意を表したい。

註

- 註1 松尾寿「松江ふるさと文庫5 城下町松江の誕生と町のしくみ—近世大名堀尾氏の描いた都市デザイン—」| 山城と城下町の建設 城下町誕生前の木次・白潟 松江市教育委員会 2012年
 註2 山根正明「松江ふるさと文庫6 堀尾吉晴城—松江城への道—」松江市教育委員会 2009年
 註3 岡宏二「松江藩の時代」| 中世のブレ松江 山陰中央新報 2008年
 註4 末次城の所在に関しては2説あり、「鳥根県誌」では荒隈山にある丘陵にあったとされ、「松江市誌」などでは亀田山にあったとされる。文献では出雲守護佐々木氏の支流末次氏がこの一帯を支配していたとされ、戦国時代の天文元年(1532年)に尾子経久の次男堀治興久が謀反を起こしてこの城を攻めたとされる。その後、江戸時代になり、堀尾氏により亀田山に松江城が築かれたため、末次城の遺構は消滅しているものと思われる。

主要参考文献

- ・松江市文化財調査報告書第148集 | 城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書1 | 鳥根県松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2012年3月
 ・松江市文化財調査報告書第139集「松江城下町遺跡(殿町287番地)(殿町279番地外)発掘調査報告書—松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書—」鳥根県松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2011年
 ・鳥根県中近世城館跡分布調査報告書第2集 | 出雲、隠岐の城館跡 鳥根県教育委員会 平成10(1998)年3月

出上 種名	番号	通称	種別	品種	産地	法 量 (g)			生産地	九段線年 (期)	備 考	生産地 年 代	
						L法	既 産	その他					
B-115	71	1番 (SK69)	稲藪	稲		11.8	4.7	7.1	肥後	Ⅱ-2	既産 丹波 高台まで既産 内産 既産	1650-1650	
	72	1番 (SK67)	木梨	梨			4.4	3.3	豊後				
	73	1番 (SK1)	赤梨	内梨				6.5		肥前			
	74	1番 (SK1)	赤梨	梨			18.1	2.0		肥前	赤井内 感藤系 内内産 既産 産付		
B-116	75	1番 (SK1)	赤梨	梨		11.3	4.7	6.1	肥前	Ⅱ	赤井内 大野系 内内産 既産 内産 産付 1品種 肥後 近 産付 既産	1620-1690	
	76	1番 中産	赤梨	梨	肥後	7.4	3.0	3.7	肥前	Ⅱ	内内産 既産 産付 既産 内産 産付	1690-1730	
	77	1番 中産	赤梨	梨	肥後	3.0	2.6	2.6	肥前	Ⅱ	大野系 既産 産付 既産 内内産 既産 産付	1690-1730	
	79	1番 中産	赤梨	梨		6.0	3.9	6.1	肥前	Ⅱ	内産 高台まで既産 内内産 既産		
	79	1番 中産	赤梨	小水梨	下川内産			3.8		肥前	Ⅱ	高台 (肥前) 内内産 既産	1750-1800
	80	1番 (SK1)	木梨	下梨	高野山下梨	21.5	19.4	厚: 3.2 寬: 6.6			肥前	高野山 木梨の 新産	
	81	1番 (SK1)	木梨	内梨		9.2	4.9	厚: 3.2			肥前	木梨の 木梨の 新産	
	82	711-714産	梨	梨				2.3		肥前	Ⅱ	内内産 既産	1600-1690
	83	714-717産	梨	小梨				3.8		肥前	Ⅱ	内内産 既産 内産 産付	1620-1650
	84	717-714産	木梨	木梨				39.2	3.2 厚: 0.8		Ⅱ	木梨の 木梨 内内産 既産 木梨の 産付	
B-117	85	1番	赤梨	梨			0.8	7.0	肥前	Ⅱ	内内産 産付	1690-1690	
	86	1番	赤梨	梨		8.6		1.8	既産	Ⅱ	肥前 中産 上野 既産 肥後 既産		
B-118	87	1番	赤梨	梨		9.7	3.8	3.2	肥前	Ⅱ-2	既産 既産 内産 内産 産付 産付 既産	1750-1770	
	88	1番	赤梨	梨		5.4	4.0	2.6	肥前	Ⅱ	内内産 既産 内産 既産 既産	1740-1750	
	89	1番	赤梨	梨		5.4	4.0	3.0	肥前	Ⅱ-3	内産 高台まで既産 内産 既産 既産	1620-1690	
B-119	90	1番	赤梨	梨		12.4	6.6	2.4	肥前	Ⅱ	内産 産付 産付 既産		
	91	1番	赤梨	梨		12.6	3.1	7.8	肥前	Ⅱ	赤井内 既産 内産 上野系 内産 既産	1750 産付	
B-120	92	1番	赤梨	梨		10.7	8.7	3.9	肥前	Ⅱ-2	内内 上野系 内内 既産 内内 産付	1630-1690	
	93	1番 既産	赤梨	梨		12.8	1.8	3.2	肥前	Ⅱ	既産 内産 産付 産付 既産 既産 既産	1650-1690	
	94	1番 既産	赤梨	梨		6.4	3.8		肥前	Ⅱ	既産 産付 内内産 産付 既産 既産 既産	1690-1730	
	95	1番 既産	赤梨	梨	くらわんか	4.3	4.7		肥前	Ⅱ	既産 産付 内内産 産付 既産 既産 既産	1690-1730	
B-121	96	1番 既産	赤梨	梨		30.6		11.6	肥前	Ⅱ	既産 産付 内内産 産付 既産 既産 既産	1690-1730	
	97	1番	赤梨	梨	くらわんか	31.2	2.0		肥前	Ⅱ	既産 既産 内内産 産付 既産 既産 既産	1690-1730	
B-122	98	1番	上梨	灯台梨		10.8	7.0	2.8	肥前	Ⅱ	既産		
	99	1番	上梨	灯台梨		9.2	4.8	2.0	肥前	Ⅱ	既産		
	100	2番 (SK2)	内梨	梨			10.8	2.2	肥前	Ⅱ-2	既産 内内 既産	1630-1650	
B-123	101	2番	上梨	灯台梨		11.8	4.0	2.2	肥前	Ⅱ	既産 内内 既産		
	102	2番	赤梨	梨		12.0		5.0	肥前	Ⅱ	既産 産付	1610-1650	
	103	2番	赤梨	梨		4.8	2.4		中産		既産 内内産 既産 内内 既産		
B-124	104	2番	赤梨	梨		14.3	8.0	2.8	中産		既産 内内産 既産 内内 既産		
	105	2番	内梨	梨	酒樽	14.4		2.2	肥前	Ⅱ	内内産 既産 内内 既産 既産 既産	1610-1650	
	106	2番 中産	内梨	梨		5.2	3.7		肥前	Ⅱ	内内産 既産	1610-1650	
B-125	107	2番 中産	内梨	梨		3.4		3.9	肥前	Ⅱ	内内産 既産	1610-1650	
	108	2番	赤梨	梨		22.0		4.3	中産		既産 既産 内内産 既産 既産	1690-1730	
B-126	109	2番	赤梨	赤梨	千島梨	12.2	5.3	2.3	肥前	Ⅱ	既産 既産 内内産 既産 既産	1690-1730	
	110	2番 中産	木梨	梨	高野山	15.5	2.6	厚: 0.5			既産 既産 内内産 既産		

日赤保育種

出上 種名	番号	通称	種別	品種	産地	法 量 (g)			生産地	九段線年 (期)	備 考	生産地 年 代
						L法	既 産	その他				
H-11	111	1番 中産	赤梨	梨	赤野系	34.0	3.6		肥前	Ⅱ	内内産 産付	1650-1670
	112	1番 中産	上梨	灯台梨		11.6	6.3	1.9	肥前	Ⅱ	内内産 上野系 既産 既産 内内産 既産 既産 ナブ 既産 既産 既産 既産	
H-12	113	1番	赤梨	内梨		10.8	6.4	2.4	赤野系		内産 既産 ナブ 既産 既産 内内産 既産 ナブ L法既産内内産に既産	
	114	1番	上梨	灯台梨		10.8	6.7	3.8	赤野系		内産 既産 ナブ 既産 既産 内内産 既産 ナブ L法既産内内産に既産	
	115	1番	赤梨	梨		14.4		2.9	肥前	Ⅱ	内内産 産付	1610-1620
H-13	116	1番	赤梨	梨				4.7	肥前	Ⅱ	内内産 既産 内内産 既産 内内産 既産 既産 既産	1610-1620
	117	1番	赤梨	梨				3.0	中産		内内産 既産 内内産 既産 内内産 既産 既産 既産	
	118	1番	赤梨	梨		4.4		1.9	中産		既産 既産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	
	119	1番	赤梨	梨		6.8	2.7		中産		既産 既産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	
H-14	120	1番 既産	赤梨	梨		46.2	27.4	7.8	肥前		内産 ナブ ナブ 既産 既産 既産 ナブ	1650-1730
	121	1番 既産	赤梨	梨		11.4		2.5	肥前	Ⅱ-1	内産 上野系 既産 既産 既産 既産	1690-1730
H-15	122	1番 既産	赤梨	梨				3.4	肥前	Ⅱ	既産 既産 内内産 既産 既産 既産 既産	1690-1730
	123	1番 既産	赤梨	梨	くらわんか	13.4	8.2	2.7	肥前	Ⅱ-1	既産 既産 内内産 既産 既産 既産 既産	1690-1730
H-16	124	1番	上梨	灯台梨		11.6	5.6	1.7	肥前	Ⅱ	既産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	
	125	1番	上梨	灯台梨	千島梨			2.9	厚: 2.4		既産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	
H-17	126	1番	赤梨	梨		5.9	2.9		肥前	Ⅱ-1	内内 産付 内内 既産	1630-1650
	127	2番 中産	赤梨	梨		10.9	1.1	3.3	肥前	Ⅱ-2	高台 内内 上野系 既産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	1690-1730
	128	2番 中産	赤梨	梨		4.9		2.1	肥前	Ⅱ-2	内内 上野系 既産 既産 既産 既産 既産 既産	1690-1730
H-18	129	2番 中産	赤梨	梨		7.9	2.6		中産		既産 内内産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	
	130	2番 中産	上梨	灯台梨		11.3	4.1		肥前	Ⅱ	既産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	1690-1690
H-19	131	2番 中産	内梨	梨	新梨	11.0	4.4	2.4	肥前	Ⅱ-2	内内産 ナブ 中産 内内産 既産 既産 既産 既産	1690-1690
	132	2番 中産	上梨	灯台梨		21.4	5.8		肥前	Ⅱ-2	内内産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	1690-1690
	133	2番 中産	内梨	梨		4.2	2.2		肥前	Ⅱ	内内産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	1690-1690
H-20	134	2番 中産	内梨	梨		10.9	1.6	3.3	肥前	Ⅱ-2	内内産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	1690-1690
	135	2番 中産	内梨	梨	高野山	11.0	2.8	2.4	肥前	Ⅱ-2	内内産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	1690-1690
H-21	136	2番	内梨	梨		10.2	6.7		肥前	Ⅱ	内内産 既産 既産 既産 既産 既産 既産	1690-1690

表7 出土遺物一覧表

A種出土遺物

単位:点数(点)、重量(g)

出土場所	出土層位(層)	計	磁器	陶器	土6器	鉄器	土製品	瓦	金属製品	木質遺物	竹角類	芦竹製品	その他
A-T1	探取上	点取 16	10	4									2
	第1面	点取 890	450	340									170
	第2面	点取 418	236	9	1	1	154						
A-T2	探取上	点取 21	21	15				5	1				2
	第1面	点取 25	4	15									
	第2面	点取 3,540	189	1,600				1,410	70				730
A-T3	探取上	点取 117		117									
	第1面	点取 8	6										2
	第2面	点取 215	190								130		
A-T4	探取上	点取 5	2	2									
	第1面	点取 82	11	71									
	第2面	点取 0	0	0									
A-T5	探取上	点取 4		2	2								
	第1面	点取 81		30	49								
	第2面	点取 0	0	0									
A-T6	探取上	点取 0	0	0									
	第1面	点取 0	0	0									
	第2面	点取 0	0	0									
A-T7	探取上	点取 2		1	1								
	第1面	点取 35		32	3								
	第2面	点取 20	3	12	2								1
A-T8	探取上	点取 874	45	740	25								60
	第1面	点取 8	2	5									
	第2面	点取 282	152	130									
A-T9	探取上	点取 0	0	0									
	第1面	点取 4	1	3									
	第2面	点取 112	91	21									
A-T10	探取上	点取 10	3	4			1	2					
	第1面	点取 2,060	27	160			3	1,690					
	第2面	点取 7		1							4	2	
A-T11	探取上	点取 1,266		849							300	30	
	第1面	点取 0	0	0									
	第2面	点取 0	0	0									
A-T12	探取上	点取 0	0	0									
	第1面	点取 3	2	1									
	第2面	点取 40	21	6									
A-T13	探取上	点取 0	0	0									
	第1面	点取 0	0	0									
	第2面	点取 0	0	0									
A-T14	探取上	点取 6	2	3									
	第1面	点取 112	17	58									1
	第2面	点取 8	2	3	2								32
A-T15	探取上	点取 212	136	91	85								
	第1面	点取 19	1	8	5								
	第2面	点取 1,797	27	800	270								5
A-T16	探取上	点取 3	1	2									
	第1面	点取 43	1	28									
	第2面	点取 0	0	0									
A-T17	探取上	点取 9	4	2									
	第1面	点取 639	246	162									
	第2面	点取 30	30	17	1								2
A-T18	探取上	点取 0	0	0									
	第1面	点取 2,570	857	1,270	50								129
	第2面	点取 0	0	0									264
A-T19	探取上	点取 0	0	0									
	第1面	点取 1		1									
	第2面	点取 67		67									
A-T20	探取上	点取 0	0	0									
	第1面	点取 0	0	0									
	第2面	点取 0	0	0									
A-T21	探取上	点取 9	4	5									
	第1面	点取 1,526	226	940									
	第2面	点取 10	1	6									
A-T22	探取上	点取 413	170	243									
	第1面	点取 0	0	0									
	第2面	点取 0	0	0									
地トビット	探取上	点取 28	11	16									1
	第1面	点取 1,546	325	1,029									11
	第2面	点取 33	13	17									
A種地中蔵	探取上	点取 0	0	0									
	第1面	点取 31	8	12									
	第2面	点取 1,228	330	829									88
A種合計	探取上	点取 149	50	78	2		0	3	3	1	0	0	8
	第1面	点取 10,421	2,215	5,361	25		0	267	1,410	70	0	0	1,049
	第2面	点取 120	66	64	0		2	3	3	1	0	0	0
A種合計	探取上	点取 10,411	2,482	4,852	124		283	346	1,082	2	0	0	0
	第1面	点取 41	8	12	8		0	0	0	0	11	2	0
	第2面	点取 3,515	243	1,707	319		0	0	0	0	120	36	0
A種合計	探取上	点取 311	101	154	15		2	6	6	2	11	2	8
	第1面	点取 24,247	5,079	11,013	496		293	833	3,269	72	120	36	1,049
	第2面	点取 0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0

A種合計

探取上	点取	149	50	78	2	0	3	3	1	0	0	0	8
第1面	点取	10,421	2,215	5,361	25	0	267	1,410	70	0	0	0	1,049
第2面	点取	120	66	64	0	2	3	3	1	0	0	0	0
探取上	点取	10,411	2,482	4,852	124	283	346	1,082	2	0	0	0	0
第1面	点取	41	8	12	8	0	0	0	0	11	2	0	0
第2面	点取	3,515	243	1,707	319	0	0	0	0	120	36	0	0
探取上	点取	311	101	154	15	2	6	6	2	11	2	8	1
第1面	点取	24,247	5,079	11,013	496	293	833	3,269	72	120	36	1,049	4
第2面	点取	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※点十遺物の点数は、破片も含めてカウントした。また、都合して一単位と名づけるものは10点とカウントした。

表8 出土遺物一覧表

B様出土遺物

研究ノ成果(表) 巻第 59

出土場所	出土層位(面)	計	編織	陶器	土器群	焼物類	土製品	瓦	金属製品	木質遺物	骨角類	ガラス製品	その他
V-7a	散見土	点数 6	3	3									
	第1面	点数 104	50	74									
	第2面	点数 2	1	1									
	第3面	点数 55	27	28									
B-T2	散見土	点数 0											
	第1面	点数 2	1	1									
	第2面	点数 226	118	20									
	第3面	点数 0											
V-7b	散見土	点数 10	5	4									1
	第1面	点数 803	380	402									21
	第2面	点数 19	3	6									
	第3面	点数 1,232	116	118			142			840			
B-T4	散見土	点数 1		1									
	第1面	点数 100		109									
	第2面	点数 4		3									
	第3面	点数 173		122									
B-T5	散見土	点数 0		3									
	第1面	点数 5	2	3									
	第2面	点数 244	144	100									
	第3面	点数 0											
B-T6	散見土	点数 0											
	第1面	点数 6		4									
	第2面	点数 460		202									
	第3面	点数 4		2									
B-T7	散見土	点数 236		176				960					
	第1面	点数 8		2						1	5		
	第2面	点数 275		11						4	260		
	第3面	点数 4		2									
B-T8	散見土	点数 09		52									
	第1面	点数 0											
	第2面	点数 0											
	第3面	点数 0											
B-T9	散見土	点数 13		5									
	第1面	点数 260	420	260									
	第2面	点数 6		3									
	第3面	点数 971	121	580							260		
B-T10	散見土	点数 0											
	第1面	点数 27	11	11		1						2	1
	第2面	点数 1,290	250	710		28		132				132	27
	第3面	点数 0											
B-T11	散見土	点数 1		1									
	第1面	点数 9		9									
	第2面	点数 6		4		2							
	第3面	点数 214	75	201									
B-T12	散見土	点数 0											
	第1面	点数 4		2		1							
	第2面	点数 28	11	40		21							
	第3面	点数 4		2									
B-T13	散見土	点数 0											
	第1面	点数 531		420						111			
	第2面	点数 0											
	第3面	点数 15		7		6							2
B-T14	散見土	点数 980	200	320									460
	第1面	点数 0											
	第2面	点数 0											
	第3面	点数 2		2									
B-T15	散見土	点数 107		107									
	第1面	点数 0											
	第2面	点数 0											
	第3面	点数 0											

出土地所	出土地位(番)	計	畑作	園芸	土特産	伐採産	土製品	其	金属製品	木質資源	件賃賃	ガラス製品	その他
B-114	概算上	点数 市債	0 921	1 81	5 840								
	第1面	点数	1		1								
		市債	95		95								
		市債	0										
B-115	概算上	点数 市債	0 91	3 42	1 30							1 19	
	第1面	点数	11	1	3	2							1
		市債	1,250	8	880	165					163		55
		市債	0										
B-116	概算上	点数 市債	4 240		4 240								
	第1面	点数	0										
		市債	0										
		市債	0										
B-117	概算上	点数 市債	14 2,202	5 180	8 1,500		1 572						
	第1面	点数	2	1									1
		市債	150	66									84
		市債	0										
B-118	概算上	点数 市債	5 1,048	2 328	3 710								
	第1面	点数	1	1									
		市債	15	25									
		市債	0										
B-119	概算上	点数 市債	10 740	6 220	4 520								
	第1面	点数	22	10	8	2					3		
		市債	1,720	649	900	85					482		
		市債	0										
B-120	概算上	点数 市債	11 551	3 77	7 431		1 24						
	第1面	点数	5	1	3						1		
		市債	55	5	42						8		
		市債	0										
B-121	概算上	点数 市債	0 625	3 75	3 360								
	第1面	点数	0	3	3								
		市債	8	2	3	3							
		市債	308	120	24	115							
B-122	概算上	点数 市債	1 42		1 42								
	第1面	点数	0										
		市債	0										
		市債	0										
B-124	概算上	点数 市債	5 824	1 14	3 910								
	第1面	点数	2	1	1								
		市債	74	44	30						6		
		市債	0										
B-125	概算上	点数 市債	3 169	1 26	1 3							1 140	
	第1面	点数	0										
		市債	0										
		市債	0										

B様合計

概算上	点数	162	71	79	3	0	2	0	0	0	0	0	6	1
第1面	市債	12,432	2,844	8,184	80	0	665	0	0	0	0	0	632	22
	点数	95	28	36	13	0	1	3	0	16	0	0	0	2
	市債	7,874	1,267	3,430	451	0	142	674	0	1,896	0	0	0	132
第2面	点数	28	3	8	4	0	0	0	1	11	0	0	0	1
	市債	982	95	182	51	0	0	0	4	367	0	0	0	82
	市債	0												
計	点数	386	100	123	30	0	3	3	1	27	0	0	6	4
市債	21,088	4,307	11,795	582	0	807	671	4	2,693	0	0	632	240	

表9 出土遺物一覽表

保育棟出土遺物

単位：点(個)、重量(g)

出土層序	出土層位(面)	計	磁器	瓦葺	土製品	漆器類	土製品	瓦	金銅製品	木質遺物	骨角類	ガラス製品	土文物
H-T1	総点	1											
	第1面	33	0	22	1								
	第2面	154	93	71	31								
H-T2	総点	46		130	70					300			
	第1面	31	0	3	6								
	第2面	304	22	78	361								
H-T3	総点	0											
	第1面	0											
	第2面	21	3	12	5					60			
H-T4	総点	1,058	19	1,340	30								
	第1面	96	51	96									
	第2面	0											
H-T5	総点	0											
	第1面	0											
	第2面	0											
H-T6	総点	0											
	第1面	0											
	第2面	0											
H-T7	総点	0											
	第1面	3	1	1									
	第2面	27	25	32									
H-T8	総点	0											
	第1面	850		870									
	第2面	380		810									
H-T9	総点	0											
	第1面	7	1	1	3			2					
	第2面	428	43	17	104			284					
H-T10	総点	0											
	第1面	0											
	第2面	0											
H-T11	総点	0											
	第1面	11	1										
	第2面	0											
H-T12	総点	0											
	第1面	141	0	4									
	第2面	107	22										
H-T13	総点	0											
	第1面	2		82									
	第2面	0											
H-T14	総点	0											
	第1面	0											
	第2面	0											
H-T15	総点	0											
	第1面	4	3	1									
	第2面	614	94	500									
保育棟中庭	総点	0											
	第1面	33	20	0				3		1			3
	第2面	2,635	500	810				360		15			300
保育棟合計	総点	1,900	47	46	20	0	0	3	4	0	71	0	3
	重量	9,609	1,131	5,230	528	0	0	360	984	0	372	0	300

保育棟合計

総点	55	30	18	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
重量	3,574	754	1,483	0	0	0	0	0	15	0	0	0	300
総点	36	12	10	10	0	0	0	4	0	0	0	0	0
重量	3,127	307	1,367	419	0	0	0	884	0	0	0	0	0
総点	3	3	20	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0
重量	2,028	10	2,410	109	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総点	190	47	46	20	0	0	0	3	4	0	71	0	3
重量	9,609	1,131	5,230	528	0	0	0	360	984	0	372	0	300

写真図版



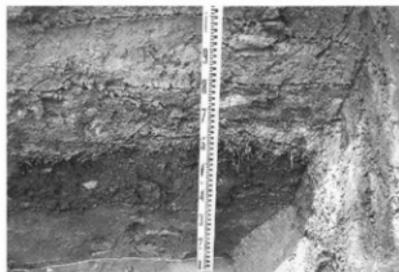
A棟 (奥)・B棟 (手前) 調査前全景 (北西から)



A-T7 西壁土層 (東から)



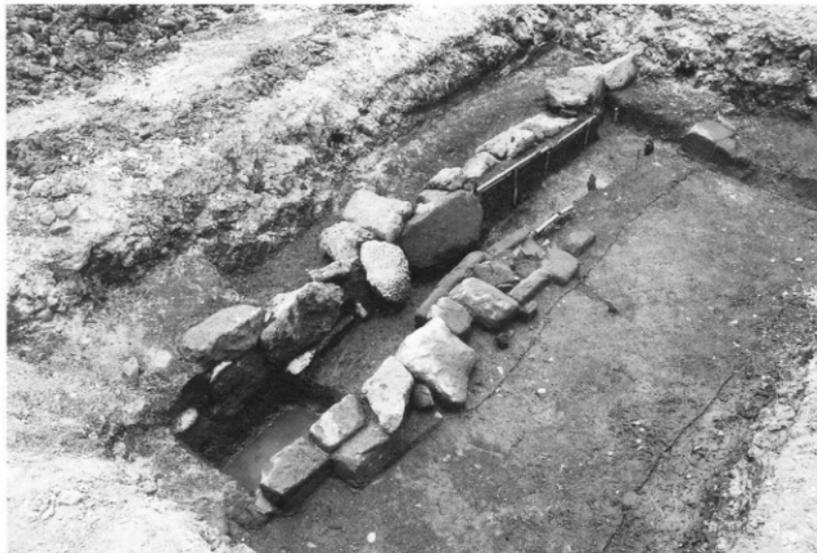
A-T11 北壁土層 [A層堆積の変化] (南から)



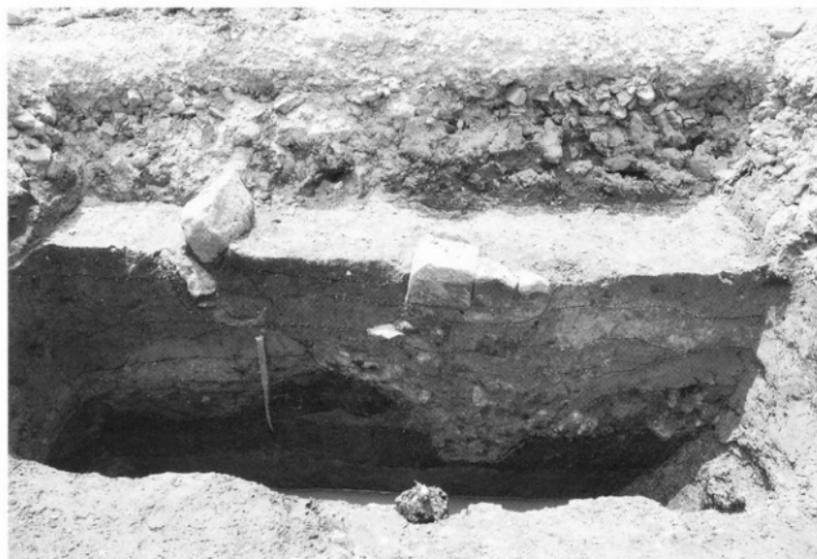
A-T8 I層上層シダ数き検出状況 (北から)



A-T11 SK11完掘状況 (北西から)



A-地下ピット部分 第1面 屋敷境石垣検出状況 (北東から)



A-地下ピット部分 屋敷境土層南北断ち割り状況 (東から)



A-地下ピット部分
屋敷境石垣 (東から)



A-地下ピット部分
南側石垣手前
竹組検出状況 (北から)



A-地下ピット部分
第2面 SP04断面 (西から)

図版 4 (A棟)



A棟 地中梁
調査状況 (西から)



A棟 東側中央部
屋敷境石垣検出 (西から)



A-T12西隣
方形石組井戸SE01
検出状況 (西から)



B-T4 西壁土層 (東から)



B-T5 第2面 A層検出状況 (南東から)



B-T6 西壁土層 (東から)



B-T8 来待石製井戸SE01検出状況 (南東から)



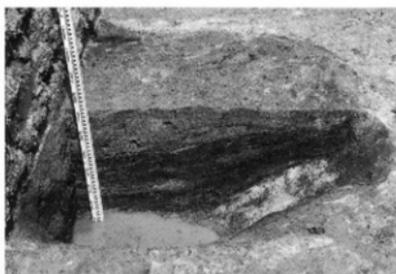
B-T11 井戸SE02断ち割り状況 [上方は来待石製、下方は木製の井戸枠] (北から)



B-ピットc 第1面 土坑・礎石検出状況 (北西から)



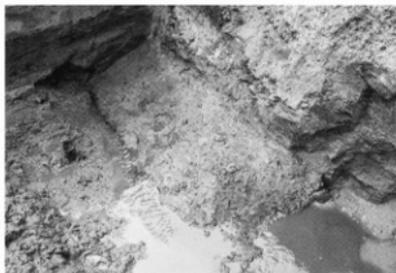
B-ピットc 木桶検出状況 (南から)



B-ピットc SK11半截 (南から)



B-T20 第2面検出状況 (南東から)



B-T23 第2面 蒸掘り溝分岐点
A層落ち込み状況 (北から)



B-T24 南壁土層
(北から)



B棟 地中梁調査状況
(西から)



B棟 地中梁
B-T17~B-T20間
北壁土層 (南東から)



保育棟調査前全景 (北西から)



H-T3 第2面 A層上面 (西から)



H-T5 北壁土層 (南から)



H-T8 西壁土層 (東から)



H-T9 第1面 礎石検出 (南西から)

A棟出土遺物 (松江城下町遺跡母衣町127-2)







48

49



50



51



52



53



54



54



55



56



56



57



59



61



62

B棟出土遺物 (松江城下町遺跡母衣町128)



63



64



65



66

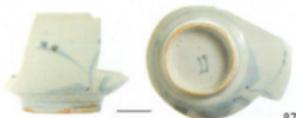
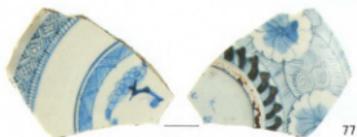
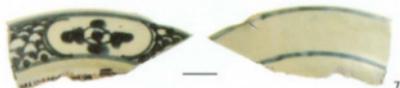


67



68







89



90



91



92



93



94



95



95



96



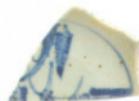
97



100



102



103



104



105



106



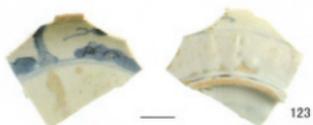
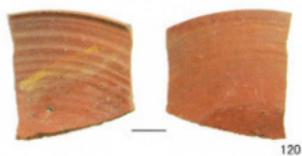
107



108



110





攪乱層中出土遺物



1. 玉縁式丸瓦
2. 肥前磁器碗蓋 [広東碗] (1760～1860年代)
3. 肥前磁器碗蓋 [広東碗] (1760～1860年代)
4. 布志名焼 備前写し皿 [土屋窯か] (1780年以降)
5. 在地系磁器碗 (19世紀以降)
6. ミニチュア陶器 羽釜
7. 在地系磁器小杯
8. 在地系陶器小杯 [高台に番号あり] (昭和期)
9. 薬瓶 [星製薬株式会社] (明治39年～)
10. 薬瓶 [弘濟薬院] (明治末～大正期)
11. 薬瓶か [INABATA]

A棟攪乱土中



1. 須佐唐津播鉢
2. 在地系陶器碗
3. 肥前磁器碗 [広東碗] (1760～1860年代)
4. 布志名焼 小杯 [鍛冶山窯力印あり] (1866年以降)
5. 肥前磁器皿 (1690～1780年代)
6. 薬瓶 [松江製剤] (昭和期)
7. 御神酒徳利 (19世紀代)
8. 薬瓶 [OXYFULL オキシフル] (昭和期)

B棟攪乱土中



1. 在地系陶器蓋
2. 在地系陶器蓋
3. 肥前系磁器小皿 [銘: 奇玉珍玩] (1780～1860年代)
4. 肥前系磁器皿 [印版手・型紙摺切] (19世紀以降)
5. 肥前磁器小碗 [みじん唐草文様] (1760～1860年代)

保育棟攪乱土中

報告書抄録

ふりがな	まつえせきじゅうじびょういんべつとうけんせつにともなうまつえじょうかまちいせき (ほろまち) はつくつちょうさほうこくしよ						
書名	松江赤十字病院別棟建設に伴う松江城下町遺跡(母衣町127-2) (母衣町128)(母衣町198-1)発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第153集						
編著者名	小山泰生						
編集機関	松江市教育委員会 文化財課 財団法人松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課						
所在地	〒690-8540 松江市木次町86 文化財課 TEL: 0852-55-5284 〒690-0401 鳥根県松江市鳥根町加賀1263-1 埋蔵文化財課 TEL: 0852-85-9210						
発行年月	2013年1月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
松江城下町遺跡 (母衣町127-2)	松江市 母衣町 127-2番地	32201	D1026-78	35°28'16" 133°03'23"	20120717 ～ 20120910	221.1㎡	松江赤十字 病院A棟建 設
松江城下町遺跡 (母衣町128)	松江市 母衣町 128番地	32201	D1026-80	35°28'17" 133°03'23"	20120808 ～ 20121011	398.5㎡	松江赤十字 病院B棟建 設
松江城下町遺跡 (母衣町198-1)	松江市 母衣町 198-1番地	32201	D1026-79	35°28'19" 133°03'25"	20120730 ～ 20120921	280.9㎡	松江赤十字 病院保育棟 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
松江城下町遺跡 (母衣町127-2)	城下町 遺跡	江戸時代 ～ 明治時代	掘立建物 土坑 屋敷境 石組水路	陶器 磁器 土師器 木製品	近世の武家屋敷の一部を調査し、 掘立建物跡や土坑などを検出した。 また、2つの武家屋敷(松平期)の 境界となる屋敷境を検出している。		
松江城下町遺跡 (母衣町128)	城下町 遺跡	江戸時代 ～ 明治時代	土坑 柱穴 井戸 大溝	陶器 磁器 土師器 木製品	近世の武家屋敷の一部を調査し、 土坑や柱穴などを検出した。また、 江戸時代初期の素掘りの大溝 を検出している。		
松江城下町遺跡 (母衣町198-1)	城下町 遺跡	江戸時代 ～ 明治時代	礎石建物 土坑 柱穴 石組水路	陶器 磁器 土師器 木製品	近世の武家屋敷の一部を調査し、 礎石建物跡や土坑などを検出し た。		

松江赤十字病院別棟建設に伴う

松江城下町遺跡
(母衣町127-2)(母衣町128)(母衣町198-1)
発掘調査報告書

平成25(2013)年1月

発行 島根県松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 藤谷口印刷
島根県松江市東長江町902-59

